
奴隸な僕と神々のポイント

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奴隸な僕と神々のポイント

【Nコード】

N7890T

【作者名】

千葉

【あらすじ】

元大学生の僕が新たな命を得た地、アマタノホシ。そこはあらゆる神々から賜るポイントでスキル、魔法、宝を得る不思議な世界だった。

さらに厄介なことに奴隷になってしまった僕はこの先どう生きて行けばいいのだろうか？ 誰か教えてくれ

奴隷になった僕（前書き）

読者の皆さんに楽しんでいただければ嬉しいです

奴隷になった僕

「さあつ、さつさとこつちへ来るんだ！ 貴様のように税を払えない孤児は王の情けで軍学校に入りその一生を王の剣として捧げるか、さもなければ野たれ死ぬことしか許されてはおらんだ」

そう言つて、何処かのファンタジーから抜け出してきたようにキラキラと輝く全身鎧を身につけた男は僕の腹部を蹴りとばす。ここ数日碌に食べ物を口にしてない僕にその攻撃がかわしきれはすもなく、まともに吹っ飛び建設予定の為に置かれていたレンガの山を崩した。

痛みで朦朧としながらも、僕はどこぞの王に一生仕えるよりは後者を選ぶだろうなと思う

そもそも返事すらしてないのに何故僕は蹴られるのだろうか？

その鎧姿の男が、騒ぎを聞きつけて集まってきたギャラリーを煩わしそうに追い払う。ギャラリーも可哀そうにと哀れみの視線をこちらへ向けるが誰一人助ける者はいない

この王国、ザルナ王国では僕のような孤児がたくさんいる

近年、東のほうで戦争がありその戦争孤児がこちらへ流れてきた。以前でさえ少ない分け前を奪い合っていた僕達はその屈強な侵略者にあっさりとやられ僕も食糧を求める為に、いつもの路地裏からこつして本通りに漁りに来て今に繋がる。

僕は弱者だ。なんとかこのどうしようもない怒りが僕の中の流れている黄金竜の血を目覚めさせないかと期待してみたけど、目覚める気配は全く無い

こんなファンタジーの世界だからそんな厨二設定も通じると思ったのにな

鎧姿の男がそんな僕の意志を介すはずもなく手首に鉄の手錠をかけて、動けない僕の体をズルズルと引っ張って行く。

鉄の手錠が手首に食い込んで思わず呻き声を上げたら、剣の鞘で頭をポカリと殴られる。

鞘のままでもよかったと感謝すべきだろうか

周りから嘲笑を浴びながら引きずられていると鎧姿の男が急に止まった。勢いのついていた僕は鎧姿の男のグリーブに再び頭をぶつけて悶えてしまう

悶えるってちょっとエロいな。こんな時に何を考えているんだろう僕は？

その原因を探ろうと男の股の間から様子を見ると、どうやら僕達の前を塞いでいる人物がいるようだ。僕はコロコロと芋虫のように横へ転がってその人物を確かめる

寝転がっているのでまず見えるのは下半身だけだ。腰からいくつもの色鮮やかな布がパレオのように足下まで伸びている。続いて、視

線を上に向けるとその人物が背の丈170〜180ぐらいで、淡い赤の着流しを身に纏った男だということが分かった。

僕の今まで見てきたアイドルなんか目じゃない程の美青年だ

灰色の髪に編みこんだ飾りがまたよく似合っている。

異国情緒溢れるその服装だが

彼と比べたらこの街に住んでいる上流階級の人間の服装でも芋臭く感じることに請け合いた

「すまない。それを引き取りたいんだが……」

思ったよりずっと高く耳に心地よいその声にうっとりして、彼の言葉の意味が理解できるまで数秒近くかかった。鎧姿の男（鎧男でいいか）も彼の放つ不思議な空気に吞まれ、僕と鎧男は揃って間抜けな顔をしていたに違いない

少し遅れて鎧男が、

「し、しかし浮浪児は軍学校に送るのが慣わしなので」

「奴隷なら別だろうか？」

奴隷、それはこの世界において地位ワーストNo.1を三年連続どころか、建国の時代から連続で受賞している。同時に親が子供にさせたくない職業でもNo.1だ

所有者にその人生を捧げるところは軍学校でも一緒だが、奴隷の証である焼印のせいで所有者の命令に逆らえないし、所有者に生殺与

奪権を委ねられている。

その上住居を持つ権利や、ほとんどの職業に就く権利、結婚する権利さえ失う。

ほとんど人として扱われていないのだ。全部乞食の友達から聞いた話だけど……

そしてこの御仁は僕を奴隷にするのが目的らしい。さすがに僕は一生誰かに喜んで縛られるほどMじゃないので、向こうが話をしている間に音をたてないように手錠外しに取り掛かる。手錠を繋いでいる鎖の真ん中から出たロープを鎧男が握っているので、脱出する為には両手の手錠を外すしかない。

最近痩せているせいで手首もすっかり細くなり、少々苦勞したがまずは右腕の脱出に成功！

よし、あせるな。ここで焦ったら台無しだ、主に僕の人生が！

自由な右腕を使って左腕に嵌っている手錠を外そうとした所でジャラツと嫌な音がる。

急いだ結果、繋いでいる鎖が擦れあつたらしい。

「あつ！？ お前何してるんだ！」

さすがにそれに気づいた鎧男が延ばしてくる手を振り払ったところで、手首と手錠の間にいい具合に隙間が開いてスルリと抜け出せた。

神よ、あなたの存在を今認識致しました

私の日ごろの行いを見ておられたのですね！

特に心当たりはないが、きっとそうに違いない

僕は走る。まるで韋駄天のごとく、ボルトのごとく

僕にとつて自慢できるのはすばやさだけぐらいだ。このままどこぞのRPGの3に行けば武道家や盗賊を超える新たな職業アランの誕生間違いない。攻撃順だけでなく守備力も上がるといっておかしな仕様の世界じゃ僕は最強なのだ

ところが僕の目の前にゲマが現れた。何を言おう僕を奴隷にするというまさに誰得？ な行動をとろうとする変わったお方だ。このままだと光の教団のもと大神殿の建設に半生を費やすことになってしまう

それだけは回避せねばならない

ギャラリーの一人であつたおばさんをゲマに向かつてタツクルして怯ませた後、逆方向へ逃げ出す……………が数歩もいかない内に鎧男に掴まつて彼の元へ連れ出された

「こいつ、もう我慢できん！ 本当なら軍学校に連れて行ってやるところだが、それだとあんたの気持ちも治まらんだらう。奴隷でも何でも好きなようにして構わんぞ」

憤慨を顕にした鎧男の鼻息が頭にかかつて髪が乱れる。

彼は鎧男の手から僕を縛つたロープを受け取ると、鉄の焼ごてに何やら呟きそれを僕の手の甲に当てた。瞬間、焼肉屋でよく聞く音と共に激痛が走る。見苦しくもがいてみせたが彼はヒョロツとした体型の割に予想以上に力が強く、しばらく腕を完全に固定すると焼きごてをパツと離した

あまりの熱さでジンジンとするその感覚こそが

これが現実であるという証

ああ、僕は奴隷になってしまった

まるで僕のこれからの行く末を暗示するようにポツリポツリ雨が降り出した

改めて紹介しよう。僕はアラン

この剣と魔法と銃の世界に堕ちた漆黒の堕天使、もとい元日本人の大学生である

至って普通の家庭に生まれ、普通の容姿を授かり、普通の人間関係を築いて普通に心臓発作で死んだ。そんな普通の僕がどういっわけか二度目の生を受けたのが、異常だらけの世界アマタノホシである

十数年前に発明された魔導機関により一部の分野、鉄鋼業や農業、軍事業などが飛躍的に上昇したが文化レベルはほとんど中世と変わらない。一部の魔導銃や携帯音楽媒体などのオーバーテクノロジーがあることを除けば、ほとんど携帯小説で見るとような異世界のイメージだと思ってくればいい

そんな世界に前世の記憶を持って生まれた僕はどうやら農民の母を見初めて無理やり行為に至った貴族の間に生まれた子らしい

父親と呼ぶのもおぞましいそいつは産まれたばかりの子供を一人養う母に碌な援助もせず、僕を捨てた。そして満足な生活の出来なく

なつた母も僕を捨てる。風の噂によると母は僕を捨てた良心の呵責や心労やらで亡くなつたらしいが、それは僕にとつてどうでもいいことだ。勿論乳離れが出来るまで育ててくれたことを僕は感謝している

一応は元大学生だし、自分はいらない子だつたんだと嘆くこともない。この世界で肉体においては彼女の息子なのかもしれないが、最も重要な精神は何処まで行つても日本人であることに変わらないのだから

そんな訳でつい最近までいわゆるストリートチルドレンだつた僕は今奴隷をやっている

あれから雇い主のノノールファさんの家に住むことになつた僕の最初の仕事は掃除だつた。

彼に案内するまま街の外れに移動すると、こじんまりした二階建ての家屋が僕らを迎えた。壁一面に蔦がビッシリ茂り、荒れ屋同然の見た目のそれは家主のイメージとあまりにもかけ離れていた。もつと優美で豪華な邸宅に住んでいるという勝手なイメージを持っていただけに落胆は大きい

そしてノノールファさんが僕に着いて来いと言うと、僕の体は持ち主の意図に反して彼の後を追ひ始める。

これが奴隷の焼印の効果なのだろう。隷属の証であるヤドリギを模

した焼き痕が鈍く青色に光り、効力が発動していることを示している。それにしても自分の体が思い通りに動かないというのは気持ち悪い。手が痺れて、抓っても全く痛みを感じない時の気持ち悪さを何十倍にもしたような感じが一番近いだろう

これで通じないのなら奴隷になってみれば分かる

ノノールファさんの後に続いて中に入ると中は外よりも、もっと酷かった

あらゆるところにたくさんの本が高く積み上げられ、まるで都会のビル街のようにあちこちで高層ビルの建築ラッシュが行われている最中のようなのだ。そして幾何学模様が描かれた書類が床を埋め尽くし、唯一その全体が見える黒い革張りのソファは所々破れている

この様子だとスプリングも伸びきってしまっているだろう

「ここを適当に片付けておいてくれ。私はしばらく二階に籠もる」

彼は書類の上を踏み歩きながら更なる混沌が予想される二階への階段を上って行った

「適当」という言葉があったせいかな先ほどのように体が直ぐに動き出すことはない。とは言え、いつ体が勝手に動き出すとも限らないので僕は大人しく従うことにした。

友人に聞いてたよりも彼は奴隷の扱いが良さそうだが、それでも僕の命を握っていることに変わりなく、出来るだけ彼の機嫌をとって

おいたほうがいいだろう。

魔導機関で紙の生産も伸びたとはいえまだまだ高い紙を贅沢に使ったその書類を拾い集めることから始まり、分厚そうな本の下に置いて出来る限り皺を伸ばす。

書類を全て片付けるとその下に埋もれて長年光を浴びなかったモノたちが露わになる

虹色の羽ペン、黒インク、ナイフを持つ不気味な人形、チョーク、巨大な魔法陣、蝋燭、ガラス製の珠

まさに魔術師の象徴といわんばかりのそれらに目を奪われて手が止まりかけたが、近くの木製の箱にそれらを全て入れて誘惑を遠ざけた。

本の高層ビルは字が読めない僕には内容やシリーズ順に並べることが出来なかったため、なるべく同じ色の背表紙ごとに横に並べることとで良しとする。それらが一通り片付くと柄の途中が折れたモップを片手に天井から床まで擦りまくる

元々床はかなり汚れていたこともあり、モップで汚れを水ごと追い払うと見る間に元の美しさを取り戻していく。

今の僕ならどこぞの魔女のようにモップ一つで空を飛びそうだ
怖いものなどありはしない

「それで床に書いた魔法陣まで消してしまっただけか」

しばらくして二階から降りてきたノールファさんはほとんど侮蔑の表情で僕を見つめる。

「も、申し訳ございませんでした」

もしタイムマシンがあるならテンションが上がりまくってあらゆる所を擦っていたあの時の僕を殴ってやりたい。これは決して言い訳ではないが、その大切な魔法陣を書類の海で埋め、床に浮き出た汚れとそっくりな見た目にしたノールファさんにも一端の責任はあるだろう。勿論口には出さないけど

「それにこの魔導書の並びと違ってならない。召喚術と薬学の本を一緒くたにするなんてバカげているとは思わないか？」

語尾を荒くすることもなく、淡々とこちらの非を述べていくノールファさんのような怒り方をする人は総じて怖い

正論でガツチガツチに固められた武装以上に強固な物はないだろう

しかし、僕も魔導書の件については申し開きがある

「すみません。でも僕は文字の読み書きが出来ないんです」

そこでようやくノールファさんに表情らしい表情が出てくる。まるで想定してなかったと自らの頭を小突く様子は容姿がいいせいかわ、少しお茶目で可愛い

……ぼ、僕はノーマルだ！！

「それは想定外だったな。これから研究の助手にしようとしていたんだが文字が読めなければ意味がない。今日の仕事はもういいからさっさと休め。その代わり明日から文字を死ぬ気で覚えてもらうかな」

「はい!!」

奴隷が何かミスをした場合ムチで仕置きするのが一般的だというのに軽い叱責で済ますなんて、ノノールファさんはなんと優しい人なんだろう

聖人君子もかくや。これがイケメンでなければ僕は真の意味で彼を尊敬していただろう

ホツとすると単純な僕の体は空腹を主張し始める。そういえば朝から何も食べてない
彼はそんな僕に爽やかな笑顔を向けて、

「もう休んでいいぞ」

とおっしゃった。

「あのおう、何か食べる物は……」

奴隷という立場と遠慮がちな日本人という気性上、語尾が情けなくなってしまう

さすがにこんな空腹では眠れない

「聞こえなかったのか？ 聞こえていてその発言をしたというなら君は多少理解力が欠けているのだらう。そんな君に噛み砕いて説明してやる。魔導書の並びの件に関してはこちらの把握不足だったが、私は魔法陣を消したことを許した覚えはない」

「……お休みなさい」

「よろしい」

こうして僕の奴隷一日目は終わった

翌朝、空腹でほとんど眠れなかった僕にノノールファさんは残酷にも朝食の為に近所のパン屋にお遣いに行かせた。この状態の僕にパンを買わせるというのは、飢えたライオンの前に生肉を置いて食べるなど言っているようなものだ

なんとか鉄の自制心でおばさんから手渡された黒パンから漂う香ばしい香りの誘惑に対抗するがもう僕のHPはとつくにゼロだ。それでも家に帰るまで我慢できたのは、パンが入った紙袋を抱きかかえる僕の手の甲に刻まれた焼印が時折服の裾からチラチラと見えたからだ。

同時に胸に鉛が入っているような気にもなって帰路へ急いだ

「遅い！」

「…すみません。少し道に迷いまして」

ノノールファさんはちょうど大きなチーズの塊を切っているところだった。その横に邪魔にならないようにパンを置いて、魔導式のコンロの上にフライパンを乗せて目玉焼きを作り始める

横からノノールファさんにその様子を覗かれると悪い事をしてないはずだがそんな気持ちになる。また何か失敗でもやらかしてしまったのだろうか？

「率先して料理をつくるその心がけは素晴らしいが、私は目玉焼きよりスクランブルエッグのほうが好きだな」

計画変更。フォークで黄身を潰して全体をかき混ぜる

テーブルの上に主食の黒パン、豆のスープ、チーズ、スクランブルエッグが出揃ったところで待ちに待った朝食の始まりだ。本当なら皿に顔を突っ込んで犬のように食べてしまいたいほど空腹だったが、さすがに元日本人の誇りからそんなことは出来ない。

大人しく黒パンを千切ってスープに浸して食べていると再び視線を感じた

「あの、何ですか？」

「いや、浮浪児の割りには綺麗に食べるものだと思ってね。元貴族か何かかい？」

「そんなんじゃないよ」

「ふうん、まあいいか。そこそこ礼儀も出来るみたいだし、助手にはいい。問題は字の読み書きが出来ないことだな」

うんうんと頷いてこれからの教育プランを考えるノールファさんには悪いが、僕はきつと良い生徒ではなれないだろう。この地に生まれて十年、中国語の母音を増やして日本語の文法と合体させたよ。うなこの世界の大陸言語は違和感なく喋れるようになったが、未だ頭の中では日本語で考える癖が残っている。なまじ日本語の知識がある部分、この世界の蛇がウニヤウニヤとうねっているような文字を覚えるのは難しいだろう

お腹がいっぱいになってからはノールファさんとマンツーマンで大陸文字の授業だ

文字は全部合わせて300文字と外国に比べれば多かったが、日本では常用漢字ですら1945文字。現存する漢字に至っては約5万文字と桁が二つ違う（まあ日本人もほとんど使わないからこの例はあまり正しいとは言えないかもしれない）

それにノールファさんが子供向け用の絵本と共に一文字ずつ発音と書き方を教えてくれたので、後は見本に倣って書いて覚えるだけだ。

意外だったのが大陸文字も漢字と同様に元々絵から派生して字になったものが多く、中には絵のまま書くような字もあり書いていて飽きないし、それに何より分かりやすい

上手く字が書けた時なんかはこのまま額縁に入れて飾りたい衝動に駆られる。でも大抵そういうのは後々見た時なんかに黒歴史になってしまうのがこの世の理だから、羽根ペンの羽根の部分でサラッと

書いた字をなぞり消す。

ちなみにこの羽根ペンは掃除の時に見つけた虹色の羽根ペンで、そのペンで書いた字なら羽根で字をなぞれば消せる優れ物である

奴隷の身分であまり字の練習用に紙を消費するのは良くないからこの羽根ペンに助けられているのだが……

「もう無理だ！ これ以上書いたら腱鞘炎になる」

「腱鞘炎？ その程度でか？」

ゲツ、字を書くことに夢中でノノールファさんの存在をすっかり忘れていた。

「き、聞き間違いですよ。僕は狼のように犬歯妖艶になりたいな」と言っ たんです！」

自分でも滅茶苦茶なことを言っているのは分かっているけどここは突き通すしかない

彼も必死な僕を見て軽く笑うと、

「ちょうど休憩したいと思ったところだ。お茶を入れてくれるか？」

今にもやけてしまいそうな顔を隠す為に僕はキッチンへ急いだ。缶に入っている茶葉は紅茶のそれによく似ていたので熱湯を注いだ後、蒸してみた

すると茶葉の何ともいえない香りがそこらに流れ出す。どうやらこのやり方で合っていたらしい

『ピコーン。アランは英知の神ベイリーブから1ptの祝福を受けた』

「うわっ！？ 何だ今の音は？」

やけに近くからそんな電子音が聞こえた。いや、脳内から聞こえたのか！？

兎に角空耳にしてはハッキリしていたし、ひよっとするとノールファさんが僕に悪戯で何か魔導具を使ったのかもしれない。彼の性格からそういう性質の悪い悪戯はしそっだし納得だ

でもやはりあまりいい気分ではないので出来たお茶をノールファさんの前に置いて開口一番に告げた

「ノールファさん。お茶を作っている際にああいう悪戯をされたら困ります」

あれ？ 何故ノールファさんは訳のわからない表情をしているんだ？

とぼけている可能性もあるが、僕の目からは本当に意表を突かれて呆気にとられているようにしか見えない

「何のことだ？」

「じゃあ、さっき頭の中から変な声が聞こえてきたのは…？」

「何だ。神の祝福があつたのか」

神の祝福？ 元々信仰心に薄い僕としては実在すらしない神が寿命を延ばすなり、死んだ後に天国に行くよう計らってくれるとは到底

思えない。祝福なんて結局、信者を増やすためのエサに過ぎないのだ。まあこれはあくまで僕個人の考えだから人に押し付けようとも思わないんだけど、雇い主が信仰しているのなら話は別だ。

これから先教義に従って行動しなければいけない時に僕一人だけ知らなかったら雇い主であるノールファさんに恥をかかすことになりかねないからだ

「すみません。神の祝福って何ですか？」

「うん？ お前の故郷では言い方が違うのか？ 英知の神ベイリーブや、戦の神クレマティス、魔の神アネモネなどの神々から恩寵を賜ることだ。ptはその貢献度によって変化するけどな」

「1ptって大きいんですか？」

「飴玉一個分を大きいという人はあまり聞かないな」

何だかノールファさんの言い方だとこの世界だと神は当たり前前存在で、その祝福とやらで貰ったptは物に変換できるらしい

そういえば僕以外の浮浪児はしばしば街の神殿に行っていたような気がする。そこでptと物を交換していたとするなら、僕のように生活に困って奴隷になるような子が少ない理由にも納得出来る。

「そ、そのptってどうやってたら確かめられるんですか？」

「まさか全く知らないのか？ ……ホメオ・パサラスと唱えてみる」

言われた通りに唱えると目の前に茶色の革表紙の本が現れた。それが地面に落ちる前に掴んで恐る恐る中身を覗いてみる

『所有者：アラン
年齢：10 職業：奴隷
種族：人間 魔法：なし
スキル：スピード++

祝福

英知の神：ベイリープ 1 pt NEW

戦の神：クレマティス 0 pt

魔の神：アネモネ 0 pt

.....』

魔の神アネモネの下にもたくさんの神の名前が書かれていたがどれも0 ptなので意味がない。

この本を見て、どういう原理で出てくるんだとか、神はどうやって採点をしているのか、そもそも本当に神はいるのか、などいろいろ言いたいことがあるがまず最初に……何で僕はこんなにもptがないんだ！！

今まで十年も生きてきて、さっきの1 pt以外ゼロってどういうことだよ！！

あれか？ 僕が異世界人という乱入者だから、この世界の神全員を上げて僕を苛めてるって訳か！！

厨二の時に必死で覚えたギリシャ神話の神々だって人間にこんなに陰湿ないじめはしなかったぞ！

しばらく勝手に騒いだ僕が落ち着きを取り戻し、ノノールファさんが説明してくれたことをまとめると

1、この世界に神は実在する
2、その神が司る事や物において、努力や発想、貢献が認められると神が p t を授けてくれる。僕が英知の神ベイリーブから p t を賜ったのはお茶を蒸すという方法がこの世界にはなかったらしく、それを評価したらしい。ノノールファさんもここまで香り立つ紅茶は飲んだことがないと大絶賛だ

3、神殿でその p t と引き換えに食べ物から、武器、魔法、スキルまであらゆるものを得ることが出来る。尚、その p t は p t を賜った神の分しか使えない。例えば英知の神ベイリーブから貰った p t で戦の神クレマティスが p t と引き換えに交換しているバトルアックスを得ることが出来ない。逆もまた然り

4、スキルには僕の『スピード++』のように生まれつき持ったネイティブ・スキルと神から賜るアクティブ・スキルがある

そして最も重要なことだが、僕のように奴隷になってしまった人は今まで溜めた p t を全て失うらしい。これが奴隷が最も嫌われる理由だ

神々の祝福（p t）を全て失うのだから、世界に必要とされていないのと同じ意味を持つ。

他人事のようになるほどなと納得してしまう

「まさか、神の祝福を知らない人間がいるとは思わなかったぞ」

事情を説明した時は本当に人間かどうかを命令して僕の口から言わ

せるほど疑っていたが、かなり東方の出身であることと、両親のことを話すとなんとか納得したノノールファさん。今では僕を研究対象として見始める節があるのでこれから先は不用意な発言はしないよう気をつけなければ。

「大変だな。僕の人生は」

奴隷なんて……

この世界には斬滅者がいる。これはあくまで大陸言語から日本語に訳した場合、一番近い言葉が斬滅者になってしまった訳で決して僕の厨二的妄想力から生み出された造語ではないことを先に述べておこう。要は斬滅者とはモンスターと闘うことを生業としている信徒たちのことだ。

ここまでだと何かやばい匂いのするカルト集団だがモンスターが跋扈するこの世界において彼らほど頼もしい者はいないだろう。倒しても倒しても湧いてくるモンスターはその存在自体が罪であり、神はそのモンスターを倒させる為に祝福というシステムを生み出したとされている

ちなみに斬滅者の活動拠点となっている斬滅教会は各地に点在しており、そこでモンスターの討伐依頼や護衛の依頼を受けるらしい。僕みたいな一般人かつ奴隷には縁のない所だと……今日まで思っていた

きっかけはいつものように朝食をとっている際、ノノールファさんが言い出した一言

「そういえば触媒が切れかけていたな。ちょっと教会へ行って依頼をして来てくれ。

アメモリの根から花までを十束と、ユメミの花の蜜をボトル一杯ほどで充分だろう」

アメモリ？ ユメミ？ 何それ美味しいの？

さすがに自らの説明不足を僕の表情から見取った彼は、そこらの紙の裏にその花の特徴、生えている場所、採集の仕方を走り書きして受付に見せるよう言う。最も一字一字大陸文字の一覧表と見比べてその内容に気づいたのは遠くに斬滅教会が見えてきた時だった

教会まで歩いてしばらくかかるので今日の午前の文字の勉強は中止になった。その遅れを取り戻すためにこうして歩きながら勉強しているのだが一向に読むスピードは上がらず、むしろ逆に遅くなっているんじゃないかと思ってしまう

僕の頭はそこまでよく出来てないらしい

そんなことを考えている内についに斬滅教会の前にたどり着いてしまった。

名前と違って漆喰で白く染められた教会には採光のために一枚の丸ガラスが嵌められているだけで飾りっ気は殆どない。

まさに無骨、いぶし銀

闘う人たちの為にある建物だ

僕は情けなくも心臓をバクバク言わしながらその建物に入る。

礼拝堂から席と椅子を取り除いて開けた広場のようになったその場所には武装した人たちがゾロゾロと動き回り、端に設置された掲示板を眺めている人や、正面の受付で何やら話しこんでいる人もいた。僕は勿論受付に並ぶ

少々長く待つけど修道服を着た若いお姉さんがいる受付へ僕の体はかつてに動く。ノールファさんが僕にそう命令したのだろう。右手の奴隷の証は青く光ってないけどきつとそうだ

「何の御用でしょうか？」

「え」と依頼を申し込みたいんですけど」

「依頼の内容は？」

「これを見てくださいと早いと思います」

ノールファさんから渡された紙を受付嬢が確認すると、納得したように頷いた

「この依頼だと依頼料は銀貨二枚ですね」

僕が毎朝買う二人分のパンが銅貨一枚。およそ300円だ
銅貨が十枚で銀貨一枚と同じだから、銀貨二枚は6千円ということになる。ちなみに青貨、銅貨、銀貨、金貨、赤貨、白貨という順番に大きくなるが今は関係ない

銀貨二枚を渡すと依頼は受領されたらしく、もうやることもなくなつた僕は雇い主の家に戻る事にした。

手持ち無沙汰になった僕は帰り際にホメオ・パサラスと唱えて『祝福の書』を取り出してみる。やはり何度見てもptは英知の神ベイリーブの1ptだけしかない

悔しいな。やっぱり僕にも何か一つ誇れるものが……そういえば『スピード++』のスキルがあつたな。まさか僕の足の速さがそこから来ていたとは
ネイティブスキル様々だね

もう一度ホメオ・パサラスと唱えると手に収まっていた『祝福の書』が消える。寝る前に一人でなんども唱えて2828したけどまだマイブームは終わりそうにない

神様に見せてやろう。僕のスピードを！そしてあわよくばp tを下さい

猛スピードで家に帰った僕だが案の定p tは得ることが出来なかった。やはり神に対する態度が悪かつたのかもしれない

ノノールファさんも日々魔導書を見て学習することにより英知の神ベイリーブと魔の神アネモネからp tを賜っているらしいから神は努力する者を認めるのだろう
僕も楽しようと考えずに地道に大陸文字を覚える努力をするべきなのかもしれない

「そこっ、また字を間違えているぞ！朝はもつと最後の跳ねを滑らかに書かなくては！！」

「はい！！」

でもまだまだ僕は時間がかかりそうだ

「次間違えたら夕食は抜きだな」

僕の頭よ覚醒しろっ！！ 新たな力を今ここに！

案の定、そんなことは起こらず僕は夕食を食べることが出来なかった。ある意味ストリート生活時代の時と全く変わってないしかし、前と違うのは勉強すれば飯が食べられることだ。もう二度と同じ轍は踏まないよう星の光を唯一の明かりとして大陸文字の勉強を夜通し続ける僕は正に蛍雪の功を体現する現代の車胤、孫康に他ならない

小鳥が囁り始める頃、一日千秋の思いで待ち構えていたあの電子音が脳内で響いた

『ピコーン、アランは英知の神ベイリーブから1000ptの祝福を受けた』

キターーーーーーッ！！ しかも1000pt！

大陸文字を空で書けるようになったのが祝福を受けた理由だろう

喜び勇んで朝起きたノノールファさんにそのことを伝えたら

「よかったな。だが大陸文字は魔導書を読み解くために必要なものだ。これから先私の助手をしてもらうには魔導に不可欠な古代言語と古代文字がさらに必要となる」

「それも、もしかして……」

「ああ、覚えてもらう」

大陸文字だけでも大変だったというのに古代言語？ 古代文字？
僕はこれ以上の努力を想像して少しクラツと来た。神は人間に何を
求めているのだろうか？

その日はほとんど何をしたかというのは覚えてない。ノールファ
さんが何やらテーブルの上に書置きを残して二階へと消えて行った
ことだけは覚えているが、それもまるで起きながら夢を見ているよ
うで記憶も曖昧だ

日が暮れてお腹が空腹を主張しだして僕はやっと覚醒した。

ヤバイ、もう夕食の時間をとくに過ぎている！ ノールファさ
んはきつと怒って僕の食事を抜きにするだろう

二階のノールファさんを呼ぶ前にテーブルの上に置かれた紙に気
づいた。もしかして僕にまだ他の命令をしていたのかも
気づくのに遅れたから今日中には間に合わないかもしれないけど目
を通しておく必要があるだろう

『私は一週間程部屋に籠もる。食事に関しては用意があるので心配
いらぬ』

パンは一週間の支払いを済ましているものでいつもの所に受け取りに
行くといい

適当な古代言語と魔導の基礎についての本を数冊用意しているの
それに目を通しておくように。一週間後古代言語と魔導についての
質問に答えられなければお仕置きだ』

とりあえず直ぐに怒られるという事はなさそうだ。一週間後の僕の頑張り次第で

とにかく今日はもう勉強する気にならない。夏休みの宿題なんかも早め早めにやるのが後で楽というのが優等生の考え方なんだろうけど、僕は生前も今も劣等生で嫌なことを遠回しにしたい典型的な駄目人間タイプだ。

簡単に夕飯を済ますと、スプリングが伸びてすっかり寝にくくなつてしまったソファアで眠りについた

翌朝、パン屋のおばさんからパンを受け取ると懐かしのストリート生活時代の友の下へ向かった。ノールファアさんのお世話と大陸文字の勉強に時間を費やしてきたので友の顔を見る為にはこういう自由時間を利用するしかない。ノールファアさんをお世話する身が逆にお世話になっていることについて思わないでもないが、一人分のパンを皆で一緒に食べることぐらい別に構わないだろう

複雑に入り組んだ路地に進み、やっかいな新参者たちの巣窟を抜けて、雨漏れが酷い懐かしの住処にたどり着く。
二階の半分崩れた床に向かって小石を投げると懐かしい顔がそこから覗いた

「アランじゃねえか！　ここ数日見なかったんで軍学校へ連れて行かれちゃったかと思っただぜ」

赤髪で口が悪いが数年間寝食を共にしてきた女リーダー、ザシがそう出迎えると住処の中から数人が出てくる。皆僕が帰ってきたことが信じられないようだ

とりあえず話は中だと、ほとんどぎゅう詰めの住処でささやかな歓

迎会が開かれた

「皆も元気そうじゃった」

誰一人太っている奴はいないけど皆目に生気が溢れている。おそろく僕という存在がいらないせいで分け前が増えたのだろうと腹黒いことを考えるのは早々に止めにした。考えても空しくなるだけだろう？

それに一番に答えたのはやはりリーダーのザシだ。彼女は生来リーダーになるために生まれてきたようなカリスマ性を持っているので彼女が決めた意見には誰も逆らわないのが暗黙の了解だ

「で、今まで何処行つてたんだよ？ その手に抱えられた美味そうなもんを盗りに行つてたとは言わせねえぜ」

「ザシちゃん。そ、そんなに強く言ったら、言えるものも言えないよ」

少しオドオドとしたところがまた癒し系なルミちゃん。残念ながら巨乳ではないが十年後どう化けるか楽しみな逸材だ。

「いいんだよルミちゃん。僕が勝手にいなくなっちゃったからいけないんだよ」

「いいからさっさと見えよ」

人の話を最後まで聞いた覚えがないせつかちなザシに急かされ事情を話した。ノノールファさんという人に奴隷にされてその人の家で暮らしている云々を少々虚飾して、ムチで叩かれているやら、もう少しで二人で一夜を明かしそうになった等を話すと『ムチで叩かれ

ると痛いのか?』、『初体験はどうだった?』と真に受けた答えが返ってきて笑わざるを得なかった。

業界じゃあ話を盛るのはマナーなんだぜとそれらしいことを言っただけでバカ騒ぎするのはやはり楽しかった。

「そつえばパンを持ってきたんだ。皆で分け合おう」

「いやあ……いいや。今腹減ってないし」

「じゃあルミちゃんはどうか?」

ルミちゃんはザシに何度か目配せすると

「あの……私もいいですう」

明らかに遠慮して断っている様子だったので無理してパンを置いて帰ろうとしたけどザシが抜け目なく気づいて僕の手元に返した。皆決して楽な生活をしているという訳ではないのでその行動に理解出来なかったが、珍しくキツパリ断るザシに押されて僕は家へと戻るその途中でパンが入っていた袋を忘れるという有り得ない失態に気づいて、パンを抱えながら住処へ帰るとザシやルミちゃん、力自慢のゴンズ、作戦係のアリが何やら円陣を組んで話し合っている姿を目撃した。

滅多にないその光景に好奇心が唆され、近くの瓦礫に身を隠して話の内容を盗み聞きする

「……だから、もうアランはこの仲間じゃねえ」

ザシの言葉に耳を疑った。あの仲間思いのザシがそんな言葉を口に
するだなんて有り得ないことだったからだ

「でも、さすがにそれは酷いよ！」

「ルミっぺ。今日アランが俺達にパンを渡そうとしていただろう。
あれは俺達に対する侮辱だ」

「アリの言うとおりだ」

力自慢のゴンズは毎回、アリの言うセリフに訳もなく賛同するので
ここでは無視していいだろう。

「私達は浮浪児だ。地位なんてほとんど無いに等しいけど、それで
も奴隷よりかは高い。その奴隷からパンを貰うだなんて私達の立場
はどうなる？ 生きるのに精一杯な私達だからこそそれは超えては
いけない一線なんだ。でもアランは大事な友であることに変わりな
いし、かといって奴隷として扱わなければ私達の立場はなくなっ
てしまう。」

私たちにとっても、何だかんだ言っ
て楽しそうな生活を歩んでいる
あいつにとっても仲間じゃない方が
良いんだ

「でも、でも、それじゃあアラン君が……」

「ルミっぺ。諦めな。じゃあ次あいつが来た時は追いつ形でない
んだなザシっぺ？」

「ああ」

駄目だ。僕はそんなに強い人間じゃない
仲間がいなければ、信頼できる人がいなければ、この世界で味方の
いない僕はどうやって生きていけば良いんだ？

視界が霞み、嗚咽が止まらなくなった

「うん？ ア、アラン君！？」

もう僕はいてもたってもいれず逃げ出した。後ろからルミちゃんの
寂しげな声がなくなるまで走って走り続ける。今の僕は『スピ
ド++』のスキルだ！ ってはしゃぐ気にすらならない

そうやって鼻水と涙でほとんど視界ゼロの中走ったせい、前方の
障害物に気づかず頭に強い衝撃を受けて僕はよろけた。

どうやら誰かにぶつかってしまったらしい。急いでその相手に謝ろ
うと目的の人物の姿を捉えた時僕の人生はここでお終いだと思っ
た。そのぶつかった相手がここのガキ大将で、持ち前の巨体とパワ
ーを生かして今まで少しでも舐めた真似をした奴を徹底的に痛めつけ
る最悪な奴だったからだ。

こういう相手に謝っても意味がない。どちらにしろボコボコにされ
るのなら生存確率の高い『逃げる』の選択肢を選んだ方が賢いこと
は当たり前前田のクラッカー！

錯乱してこれを読んだ若年層がジェネレーション・ギャップを受け
ること間違いなしのボケをしてしまう程今の僕の状態はおかし
いことがハッキリした

一人メダパニ状態の僕をあっさりとガキ大将の連れ二人が取り囲み
A B C D包囲網ならぬA B C包囲網が完成。因みにA B C Dとはア
メリカ、イギリス、中国、オランダの頭文字をとったものだという
ことを受験生諸君は覚えておいたほうがいいかもしれない

今の僕の精神状態はおかしい！ 今の僕の精神状態はおかしい！！
大事なことなので二度言いました

「おい、お前俺にぶつかってごめんなさいの一言もないのかよ？」

「へへっ、やっちゃいましょう」

「やっちゃやうです！」

いきなり後ろの男に背中を押され、前方へと倒れこむ僕の顔をガキ
大将がアッパーで迎えうった。軽く宙に浮かぶほどの威力のそれに
悶絶して鼻血を流しながら地面でばたつく僕を無理やり起こしてリ
ンチは始まる。

脇腹を蹴られ、鳩尾を殴られ、髪を引つ張られ、頭突きされ、脛脛
を踏まれ、体全体に痛みしか感じられなくなる。

数時間、いや三十分もしなかったのか？ とりあえず僕を痛みつけ
ることに飽きたガキ大将たちがいなくなり、体を引きずりながらと
ぼとぼと家に帰る。

さすがに相手もまだ十五かそこらで骨は折れてないが打撲が酷いし、
血も結構流れているので針で縫わなければならぬのかもしれない

そして仲間たちのあの言葉……

とにかく今の僕の気分を一言で表すなら『最悪』だ

ようやく家にたどり着いた時は体をソファーに預けて眠りたい衝動に駆られたけど、傷の手当が先だ。本当は医者にやってもらうのが一番良いのだけれど、奴隷である僕を見てくださいとは思えないし、さすがにノノールファさんも奴隷の医療代金を払ってくれる訳がないだろう。僕は何処かで奴隷という地位を甘く見ていたのだろう。今日それを充分実感した

そんなノノールファさんには悪いけどキッチンの棚に置いてある安そうな酒の蓋を開けて傷口にぶっ掛ける。後で怒られるかもしれないけど今はこっちのほうが大それた

「うおおお~~~~~!! 効く~~~~~!!」

続けて、魔導に使うのか、やたらサラサラした絹糸のような繊維の糸玉と針を鍋で熱湯消毒した後、傷口を慎重に縫い合わせる。生前も何度か縫ったことはあるけど生来麻酔の効きにくい僕にとってその痛みと、自分の体が縫われている不思議な感覚は大嫌いである

今回は麻酔無しということもあり、タオルを口に咥えて想像を絶する痛みによって冷や汗は出るわ、そのせいで視界が塞がるわで生きた心地がしなかった。

とにかくそれらを済ますと、魔冷库（ようは魔導式の冷蔵庫）から氷を出して腫れ上がった部位に当てて冷やす。

ヒンヤリした気持ちよさとジンジンする体の痛み、そして気持ち良
い倦怠感に包まれながら僕はゆっくり目を閉じた

駄目人間とは僕のことさ！

淡い意識の中寝返りをうつ。それが数度続くと徐々に覚えて無くても痛い痛みがぶり返してきた。恋心のように一度気づくともう気にせずにはいられない

「眠い。だるい。痛い」

そんな風に虚空へ愚痴をこぼしてはみたものの現状が回復するはずもないので諦めてパン屋へ向かうことにする。奴隷の証である焼印が浮かんでいる右手の甲は血がついたシャツの裾を引っ張ってなんとか覆い隠してみたものの、歩く度にシャツが微妙に引っ張られ焼印の一部が露出してしまっているので包帯を巻いて隠した。今まではそんなに気にならなかった焼印が僕の人生を呪っているようにも思える

パン屋のおばさんは毎回無愛想なのがデフォルトだと思っていたけど、僕以外の人には愛想よく接客しているのに気づいたことが更にテンションをダウンさせた

もうこうなればどこぞの黒龍波使いのように包帯を着けたまま過ごすしかないのかもしれない。そして外すようにノールファさんに言われた時はこう言うのだ

「もう後戻りは出来んぞ。巻き方を忘れちゃったからな」

そんなふざけたことを言っつて空元気になる僕

仲間の皆のことを考えるとまた鬱になるので、僕はパンを片手にノールファさんが用意してくれた魔導の本を読んでみた。ベイリーブに認めて貰ったけどまだ字を読むのに時間がかかる僕にとつてやたら婉曲的な表現や専門語が多いその本の内容は難しすぎた

途中でやはり素人治療が不味かったのか、縫い痕から再び血が流れ出すなどのハプニングもあり本の内容は全く頭に入ってこない。いや、唯一頭に『魔導入門』という本のタイトルだけは残っているけど

まあ、あと五日もあるんだ。なんとかなるだろう

翌朝僕はドアを叩く音で目覚めた。初めての来客に戸惑いノールファさん呼びそうになったけど、書き置きで研究の邪魔をするなと匂わせていたし結局僕一人で出る事にした

とりあえず用心の為にドアの隙間から相手の姿を見てやろうと少しドアを開くと、そこから訪問者の指がいきなりガツと差し込まれる！？

こいつ、もしかして強盗か！？ クツ、予想以上に力が強い
結局、あっさりとドアを開けてしまったその人物に適当な徒手空拳の構えをとる。最もこれだけの力の差がある相手にこんなことしても無駄かもしれないが、一応自分は体を懸けて守ったというポーズが後でノールファさんに来る。

そんな打算的なことを考えている内にも侵入者は手に持った植物と

ピンを隅に置き始めた。最近の強盗は物を置いて行くという話も聞かないし、どうやら僕の勘違いだったらしい

見れば、革のズボン（ジーンズみたいなやつだ）と紺のシャツを着た吊り目の美女で、腰に刀のようなものをつけていることを除けば怪しいとも見当たらない

「依頼の品はここでよかったか？」

声は少し普通の女性より低かったが彼女には合っている

それにしても依頼の品って……？

「あの、依頼の品って何ですか？」

いきなりなんで押し入ってくるんだ？ と最初に聞くべきなんだろうけど、この人が美女ということだけでそんな空気を読まない発言は脳内で、削除！ 削除！ 削除！ 削除！ 削除！ 削除！ 削除！ 削除！ 削除！ 削除！ と言いながらノートに名前を書き殴る、僕の記憶削除係さんMが削除してくれる彼女は少々せっかちさんなのだろう

「斬滅教会でアメモリの根から花までを十束と、ユメミの花の蜜をポトル一杯依頼しなかったか？」

そこでハツと気づく。この間ノールファさんに頼まれて依頼しに行ったやつだ。となると彼女は斬滅者？ 確かに先ほどの力といい、なんだか強そうないメージだ

「ああ、あれですか！ すみませんわざわざ届けてもらって」

「気にすることは無い。それより君の体は大丈夫か？ 見たところ酷い怪我をしているようだ……」

「大丈夫ですよ」

慌てて奴隷の証が焼き付けられている右腕の包帯を確認する。大丈夫だ、しっかり締まっている。しかし、目の前の女性は何か大きな怪我を隠しているように考えたのか

「少しそっちの腕を見せてみる」

なんてことを言うてくる別にいいと断つてもしつこく確認しようとする彼女にさすがに我慢が出来なくなってしまう、

「あなたには関係ない！」

と怒鳴ってしまった。さすがに普通じゃない僕の様子から彼女も動揺しながら謝ってくる

ああ、僕は何をやっているんだろう。奴隷であることの苛立ちを見ず知らずの彼女にぶつけてどうしようというんだ？ つくづく自分の矮小さに嫌になる

「あの……すみませんでした」

「いや、こちらこそ余計なお世話だったようだ。だがもう片方の腕と脚の縫合はやり直させてくれ。さすがにそれは酷い」

そんなに酷かったのだろうか？ 素人にしてはよくやったものだと
思うけど

数十分後僕の縫合の間違いは正され、よく分からないうちに彼女に
お茶を出している僕がいた

彼女の名前はセントエレス。セレスと呼んで欲しいと想像よりもフ
ランクな彼女の歳はなんと十五歳だった。どう見ても二十代にしか
見えない彼女が僕の五つ上だと言っただから驚きだ。最もこの世界
の僕も日本の同世代と比べると大分大人に見える

僕のくすんで少し癖のある金髪も幼さより、大人のおしゃれっぽく
感じるの顔立ちが少し欧米人に近いせいだろう

「お茶ですセレスさん」

「これはすまない」

まあ僕が言いたいののはこんな時間も悪くない……どころか、かなり
いい！

美人なお姉さまとゆっくりお茶を楽しむなんてリア充は死ねばいい
と思っただけ、その理論から言っると真っ先に僕は死ぬ

「セレスさんは斬滅者なんですね」

「ああ。厳しいがやりがいのある仕事だ」

セレスさんは一口お茶を啜ると微笑みを浮かべた。どうやら気に入

つてくれたらしい

「主にどんな仕事をしているんですか？」

「基本的にはモンスター討伐だな。たまにこういう採集の依頼や護衛の依頼を頼まれるのも、採集地や護衛中にモンスターが出る可能性があるので」

「へえ、お強いんですね。失礼じゃなければ少しその武器を見せて貰えませんか？」

何せ柄や鍔は違つが反りの入った刀身といい、見た目はまるつきり刀だ。子供の頃チャンバラごっこをした男の例に漏れず刀に興味を持つているし、銃弾を切り裂くことの出来る刃物なんて日本刀において他にないとまで云われている

最もその分扱いも難しいから、素人が振り回しても怪我するか刀を折るのがオチだけど…

とにかくそんな素晴らしい伝統の武器が目の前にあるかもしれないなら見たいのが男だ

「さすがに武器を預けることは出来ないが、見るだけならいいだろう」

カチツと軽い音を立て刀身が抜かれた。怪しげな光を放つ赤い刀身にはギザギザとした刃紋が並び、切先に向かうにつれてその赤色が濃くなり、黒に近い色になっている
色こそ違つが刀だ。

セレスさんも刀に対して憧憬にも似た感情を抱く僕を見て満更でも

ない様子だ

「もういいか？ 腕が疲れてしまった」

「ありがとうございます！」

「フフツ、君は変わった奴だな。……随分とお暇してしまったようだし私はそろそろ失礼するでしょう」

「よろしかったらまたいらしてください」

「君と話すとな下なのか年上なのか分からなくなるな」

それはそうだ。前世の歳を合わせると僕はもう三十近いオッサンだからセレスさんより一回り多く生きている計算になる。たまに見せる子供らしさは体の年齢に引きずられている訳ではなく、精神的に僕がまだまだガキなだけだ

「褒め言葉と受け取っておきます」

「では、またな」

そうしてセレスさんが去ってしまうと急に家の中が静かになったよ
うな気がする

もともと魔導や古代語の勉強をやる気がなかったけど、更にやる気
のなくなつた僕はまた明日と虚空にいい訳をした後早めに寝た

何やら酷い夢を見たような気がする。ノノールファさんが怠ける僕に何か呪いをかけたのだろう。そんな妄想をするってことはやはり少し後ろめたさがあるということだから、今日こそは勉強するとしてよう。

今日を合わせると期限まであと四日しかない

始まって数時間後、肝心なことを羊皮紙にメモしながら自分だけのノートを作る。他人の解釈をそのまま移してもよく分からないことが多いので、一度自分の中で噛み砕いたものを書く作業が重要だということとは大学受験の時に嫌というほど実感した

そこで少し魔導について分かったことを書くことにしよう

『魔導は魔からなり、魔を式に置き換え、魔で導くことにより魔導となる』

そんな記述から始まった魔導基礎。これを説明するにはまず魔の説
明からしなければいけないだろう

魔。魔導の発動や魔導機関に欠かせないエネルギーのようなものだが、自然界で単体としては存在しない。自然界に存在して生きとし生けるもの全てを祝福する力、神力から魔を抽出して始めて魔の行使が可能になるのだ。

例えたとするならば神力は石油（原油）で、魔はガソリンと考えると
いい
石油（原油）を加熱炉で精製して重油や軽油、灯油、ガソリンをと
りだすように、魔導師は神力から不純物を取り除くことによって魔
を抽出するのだ。

そして術式や陣によって回路をつくり、そこに魔を導くことによっ
て魔導は発動する

この三つの作業が魔導の基礎にして奥義であるということはこの本
の作者は述べているのだ

この三つの作業をする器官がモンスターの中に存在してそれを魔殊
と呼んだりもする

そしてその魔殊が魔導機関のエネルギー源にもなっているらしい

ここまででようやく魔導基礎の本の三分の一程度。残りは専門的な
表現が多くて良く分からなかった。

古代語の分厚そうな本は、生前活字離れが進んでいることを嘆いて
いた僕をまったく逆の道へと導く悪魔の書に思えてならない

結果、これ以上頑張っても集中力が持たないと三度目のいい訳で理
論武装した僕はソファに寝転がる

やっぱりあと三日は短すぎでしょ

スキル好き過ぎる

さすがにもう時間の余裕が無くなった僕は諦めて古代語の本へ打ち込むことにした

古代語は大陸語と違い、一字一字が複雑でその発音も困難を極める。その特徴として接続詞がほとんどなく単語を無理やり繋ぎ合わせたような文の構成をしていて、多様な表現が存在する

例えば、火ラミ 宿る（スクレ） 右手カザンサ

このような古代言語の組み合わせと魔で右手に火球を発生させることが可能となる

何故古代語にそのような力があるのかはまだ詳しく分からないらしいが、一説によると神が扱う言葉を古代の人間が真似て作ったところのような効果を発揮したらしい

古代語の組み合わせは無限大、魔導にはまだまだ未発掘の分野が残されている

複雑な魔導になると古代語と陣や触媒がセットになってきて、日進月歩その効果や継続時間を延ばそうと各国で争っている現在は魔導の最盛期とも言えるだろう。

当然そうなる僕も必然的に覚える量も増えるわけで、これからのことを思うと嫌になってくる

そんなこと考えて自らのやる気を削いでいる

先のことは先に考えればいい。とにかく古代語を覚えないうちはそこまで到達することは出来ないのだから。

だけど

「なんだか飽きたな」

外国語しかり、どうしてもこういう系は知識の詰め込み作業に徹してしまう。高校に入って化学がつまらなくなるように、英語が苦手になるように

やっぱり数学のように考え方次第で誰でも解けるような仕組みが必要だと思う。
数式を利用し、苦勞して答えが出たときの嬉しさは英語にはないものだ

それに古代語は文字ならともかく発音は誰かを参考にしないと合っているかどうか分からない。一応イントネーションはここで高くとか、本に書いているけど自分でも合っているのかどうか分からないまま勉強を進めて、後々間違いだっただとかになるのは御免だ

古代語は後にして魔導の勉強をしよう

それが一時の逃げだと分かっているけど何もしないよりはマシだ

魔導基礎をパラパラと捲っていき分かりやすそうなものから理解していく。ほとんどが魔導の理論についてばかりで楽しそうな内容のものはあまりなく、僕の指は次々にページを飛ばしていく。そして不意に指が止まった

『魔導初級 実習編』

そんなタイトルに惹きつけられた

興奮でページの裾を折らないように慎重に捲る

既に夕暮れ時で本も見えにくくなってきたので近くにあつたランプに火打石で明かりを灯すと視界を黄色の暖かい光が覆った
今まで暗い部屋にいたせいかしばらく明かりに慣れなかったが、直ぐに目が慣れる

『魔光：魔導の初級において全てに通じる魔導』

正式に言えばこれは魔導ではなく、魔を扱う技術の一つである

まず大地に存在する神力を感じ取り、自身に取り入れる。魔をつくるためにはまず術者の体に取り入れることが大前提だ

胸のあたりに充足感を感じてきたら神力が満ちてきた証拠。しかし神力単体を扱うことのできるのは天に御座す神々のみ

我々はまずその神力を分解せねばならない。といっても我々は特に

何もする必要はない。
体の中に取り込まれた神力はかつてに魔、聖、気等にかつてに分解するからだ。

そして分解された神力から聖や気を除いて魔だけを取り出す方法だが、これは個人の感覚によるところとしかいいようがない

胸の充足感の中から最も「これは魔だろう」と思われる物を選んで両手でしっかりと握りこんで放さないイメージを持ち、更にそれ以外の聖や気などの余計なものを追い出すイメージ。

魔という存在は個人の感覚によって全く変わってくるので師は無理に弟子にこうというイメージのものだと教授するのを辞めることをお勧めする。下手に自分の感覚を教えることによって魔の存在が掴めなくなってしまう恐れがあるからだ

そして魔を掴んだと感じたなら次の段階に移る

まずは指先がいいだろう。

指先へと魔を集める想像をしばらく続けければ指先が光るはずだ。色は人それぞれだが発光が強ければ強いほど魔に適正があるとされている

これが“魔光”。魔光が宿っている場所は通常よりも性能が強化される。拳に宿して殴れば強い衝撃を相手に与えることも出来るが、魔を直接肉体に宿すとチリチリとした痛みが走るので武器に宿して威力を高めるのがセオリーだ

また空にも魔光は描けるので戦闘時の陣の制作に適している

魔光の面白い所は魔導の一部であるにも関わらず古代語や魔導の知識を必要としないゆえに、好んで使う斬滅者が多くいることにあるといえよう

そしてもしこの方法で出来ないのなら、魔をしつかりと認識出来ないか、掴んだ魔を溢してしまった可能性がある。何度も繰り返し挑戦してみるといい』

なんたる曖昧さ。感覚的にも程がある！

『考えるんじゃない、感じるんだ！』を行くところまで突き詰めた考えだ。

魔導の基礎でこれなのだから、上級編はガーツという感じでウワツとやる！ という説明かもしれないな

有りそうで怖い

「まず神力ってどう感じ取ればいいんだ？」

そんな目にも見えない物を取り入れると言われても……ねえ？

一応目を瞑って神力を感じ取ろうとしたり、全裸になって表面積を大きくしてみたが結局神力がどのようなものか掴めないままだ。

後者で掴めたらそれはそれで嫌だけど

「……寝よう」

明日起きればこの状況が少しでも変わるだろうと僕は本気で考えていた

その日夢を見た

池、いや湖か。その浅瀬に膝の上まで水を浸からせて僕は立っていた。

空を仰ぐと闇に三日月が浮かんでいて、それを見て初めて夜だと気づく。それほどに月が明るい日だったからだ

夢の中の僕は普段見慣れた姿よりも随分背丈が伸び、精悍な顔をしている

そして僕は歩き出す。

湖の中央へ向かって、ジャブジャブと水を掻き分ける音以外何も無い世界で

水がお腹まで浸かり、肩まで浸かり、終には僕の頭まで完全に浸かりきる。

そうなる泳ぎ始める。冷たい水の中だ

何か執念染みたものでもあるのか意志はとても固い

ようやくと中心へと辿りつく立ち泳ぎをしたまま口の中から丸い何かを吐き出した

それで気が済んだらしい僕はそのまま水の中へ沈んでいった

何だか酷く気持ち悪い

夢を見たことは覚えているけど内容は良く覚えていない。気分が良くないということはどうやらあまりいい夢じゃなかったみたいだ

朝からいつものように勉強する気にはなれず、街に建てられた神殿に向かうことにした

普通の店なんかだと奴隷だとばれたら追い払われるのがオチだが、
神殿はさすがにあらゆる人種が差別なく入れる

大きな一枚岩の上から伸びるたくさんの石の円柱が上部のドーム状
の屋根を支えている。そんな何処かで見覚えのあるような神殿だ
神殿内は静謐で、隅から隅まで綺麗にされていた。僕はもちろんそ
んな中で浮いた

そういえば前お風呂に入ったのはいつ頃だろう？

神殿に設置されたそれぞれの神の祝福を受けるための受付に大理石
のテーブルが一つ、そして汚らわしい物を見る目で僕を見つめるお
じさんが一人

「ようこそ。神殿へ」

あれ、言っている事は丁寧なのにどうしておじさんの顔は僕を歓迎
してないんだろう？

「祝福を受けに来たんですけど」

「では、『祝福の書』を拝借」

あまりプライバシーを公開したくないけど仕方無い。おじさんは僕

から預かった『祝福の書』を一度タタキで払うと、奇妙な数値が付いた秤の上に乗せた。

「英知神ベイリーブが1000pt。ではこの書の中から好きなものを選び下さい。神の御慈悲をお忘れなきよう」

そう言つて広辞苑の二倍ほどの大きさの書をバンツと大理石の机の上に置く

僕はおじさんから御慈悲が欲しいよ

書の中には英知の実 10ptから英知の魔導書 10万ptまであらゆる物がそろっていたけど一番興味を持ったのはスキルの欄だ。やはり前世にないスキルという存在が僕を強く惹きつけた

でも見たところ並列思考、垂直思考、水平思考なんかはポイントが高くて手にいられないし、掃除+なんかは心底どうでもいい！

なんとか1000pt内で手にいれて、それでいて役に立つスキルはないものか？

既に数十分は迷い続けている僕におじさんも苛立ちを隠しきれなくなってきたし、そろそろ今まで見た中で適当なのを見繕うかと諦めかけていたその時……僕は見つけてしまった

「あの！ これ！ これにしてください！！」

「分かりました」

秤の針が指していた数値はゼロのところに戻ると一度祝福の書が鼓動する。

それでスキルの引継ぎが終了したのか、おじさんが返してきた祝福の書を確認すると確かにスピード++の下に言語理解+が載っていた。

良しっ、これで勝つる！

直ぐに家へダッシュで帰ると古代語の本を開く。……ペラペラ読めるって訳じゃないけど大分分かりやすくはなっているな

これなら何とか間に合うか？

翌日もほとんど寝ないでやったが古代語の文字の半分も覚ええない内に二階からノールファさんがやって来てしまった。

ここ一週間寝ずで魔導の研究をしていたのかと疑いたくなるほど目の下は隈だらけ。髪も思わずトリートメントはしているか？ と聞きたくなってしまっほほど荒れている

そして僕はこの一週間ほとんど真面目にやっていますませんでした！
本当に申し訳ありません！

「古代語と魔導の勉強はしたか？」

「いえ、あまり進まなくて」

「そうか……」

怒鳴られることはなかったが、やはり額に皺をつくり少々怒り気味のご様子だ

「『祝福の書』を見せてみる」

「えっ!?!」

「いいからさっさとしろ」

その命令に焼印が反応して大人しくノールファさんに祝福の書を渡す僕の体

僕のプライバシー情報が詰まっている書をノールファさんはマジマジと見ると一言

「何だ言語理解+は既に得ているじゃないか。一週間もあれば余裕で古代文字は覚えられたはずだが……」

はっ!?!? そういえばノールファさんが古代語や魔導の宿題を出したのは、僕が大陸文字を覚えて1000ptを貰った次の日

僕自らがノールファさんに得意気に伝えたのだから当然ノールファさんはそのことを知っていた。

更に一週間という短い中での古代語習得。そんなのよっぽどの天才でもなければ不可能だ

そして勿論僕は天才じゃない

この三つの情報から推測出来るのは、僕が言語理解+のスキルを得ることを思いついて古代語習得が出来るのかをノノールファさんは試したのだ！！

さすがノノールファさん。考えが鬼畜すぎる

「実はスキルに気づいたのが昨日だったんで……」

「じゃあギリギリ合格だな」

何に合格して、もし落ちていたならどうなっていたかを聞くのは怖すぎた。大体ノノールファさんの笑顔で想像できるし、碌なことじゃないのは確かだろう

「それにしてもお前臭いぞ」

「ノノールファさんも臭いますよ」

所有者：アラン

年齢：10 職業：奴隷

種族：人間 魔法：なし

スキル：

スピード++

言語理解+ NEW

祝福

英知の神：ベイリーブ 1pt

戦の神：クレマティス 0pt

魔の神：アネモネ 0pt

.....

奴隷と所有者（前書き）

ついうっかり、物語の前半部分を入れるのを忘れていました！
真に申し訳ありません。

奴隷と所有者

僕は知らなかったが、この家にもお風呂があつたらしい。怪我の痛みを堪えながら体をゴシゴシと垢すりで擦って汚れを落とし、痒かった頭を石鹸で洗った後大きな丸い湯船に飛び込むようにして入る。先に入っていたノールファさんが飛び散る水しぶきにつつとそうしそくに目を閉じたが特に何も言わなかった。

勿論僕の体のあちこちに怪我があるのもノータッチ

ノールファさんは研究の疲れと風呂の気持ちよさからその点を注意し、話しかけるのを躊躇ったわけではない

最近少しずつだが僕もノールファさんの無表情から掴めるものが増えてきた。ただ僕をどう扱っていいものか、どう接していいものか分かってないのだ

おそらく神から貰ったスキルはかなりのものだろうけど、対人スキルにおいてノールファさんは僕より劣っていると言わざるを得ない。かなりの人見知りをする僕が言っても説得力はないかもしれないけど

僕の心情を読んだかのようにタイミングよくノールファさんは風呂から上がると後片付けを済ませておくようにとだけ言って脱衣所へ入った。

距離を測りかねているのは僕の方がもしれない

今日だって奴隷に風呂に入らすなんてもつたいないから冷たい水でもぶつ掛けられるのかとビクビクしていたがそんなことは無かったし、有り得ないことに奴隷の僕と一緒に風呂に入るなんてどうかしてる。

世間では主人と奴隷の関係は人間と家畜以下だと言われているけどこの人なら信頼できるかもしれないと考える僕と、今は甘い蜜を吸わされて後々酷い目に遭わされるのかもと不安に思う僕がいる

考えても仕方無いと風呂から上り、溜まったお湯を流してモップでゴシゴシと擦った後に水で垢を洗い流す

居間、普段僕が寝ているソファのある部屋には既に髪を乾かし、スナック菓子のようなものをポリポリと食べるノールファさんの姿があった。

そのまま体に悪いものを食べて整った顔を醜く肥え太らせて欲しいという願望と、そんな人と一緒に住みたくないからやっぱり止めて！ というなんとも複雑な思いが脳内で交錯する

「そういえば魔導についてはまだ聞いてなかったな」

後ろの僕の気配を感じたのかスナック菓子を食べながらそんなことを聞いてきた

「基本の知識は覚えましたが、実習がどうも上手くいかなくて」

「神力を感じ取れないんだらう？」

「なんで分かったんですか！？」

ノノールファさんは振り返ると

「俺もそうだったからだ」

男に生まれてきたことを間違えているような笑顔を見せた。

とりあえず神力の取り込み方について一度ノノールファさんが教授してくれることになった

「改めて神力の取り入れ方を説明するのは難しいな。これは感覚的なものだから」

……ここは基本になぞってお前に分かりやすいようにやってみよう。まずは大きく深呼吸をしろ」

胸が膨らむほど空気を吸って口からゆっくり吐いていく

「そして深呼吸を続ける内に胸に徐々に何かが溜まっていく」

言われてみれば一呼吸する度に胸に何かが残っているような気がする。息は吐ききっているので残った空気ではない

「ゆっくり呼吸を浅く、小さくしていき最後に息を止める」

さっきまでは深呼吸に必死であり感じ取れなかったけど呼吸を止めることで胸に溜まったものの存在感が増したように感じる
魔導基礎の本でもあったように充足感を感じるのでこれが神力で間違いないだろう

「それが神力だ。やってみると簡単だろう？ もっとも私みたいに大気に存在する神力を余り感じ取れない人間にしか効果は無いようだけだな」

確かにやってみると魔導基礎の説明で充分なほど簡単だった。むしろ昨日の僕は何でこんなことに苦労していたのか不思議なぐらいだ

「ここからが最も重要な魔の抽出だ。後はその神力の中で魔だと思っ物を掴み取れ」

「はい！！」

「まあ気楽にな。私はそれを掴むのに一ヶ月かかったから」

胸の中に溜まった神力が零れ落ちていくのがはっきりと分かった

あれから二ヶ月。古代語の勉強を教わったこともあり、少しノールファさんとの距離が近づいた気がしている。分かりやすくいうと『そろそろ仲が深まりそうだ』状態

まあ僕はどこそこのキタローではないのでどうでもいい

話を戻そう。とにかくこの二ヶ月間はほとんど古代語の理解に費やした

ノールファさんという厳しい教師の下でサボる訳にもいかず、日夜古代語の複雑な文字や発音の勉強をしたおかげか古代文字は大陸文字よりも上手く書けるようになった。

古代語に関しては文字も言語もある程度ノールファさんから合格を受けた時には魔の神アネモネと英知の神ベイリーブから1000ptずつの祝福を賜っていたけれど、中々忙しくて神殿に行く機会もないのでほったらかしのままだ。

前の時のように直ぐスキルが必要なわけでもないし、それにポイントは溜められるだけ溜めて後々大きな買い物をするほうが僕の性格的にも合っている

そして今の今まであえて話題から避けていたが、

魔については……殆ど進歩がない

考えてみてくれ！ あの天才のノールファさんだって魔を掴むのに一ヶ月かかったと言うのに、たいして取柄のない僕が一ヶ月を超える早さで掴めるわけがないだろう？

まあノールファさんから聞いた話によると普通の魔導師の弟子でも十日かからずに魔を掴めるらしいけど、他所は他所、家は家だ

「やっぱり、才能ないのかな僕？」

とは強がってみたもののやはり落ち込む。

自分が何でも出来る天才だとはさすがに思っていなかったけど、それでも一般人レベルの能力はあると思っていたんだけどな。

「いいからさっさとカエルの目玉とヨモギをすり潰せ。原型が無くなるまでな」

ノールファさんの言葉で現実に帰ってきた僕は慌てて乳棒で乳鉢一杯に詰まっているその材料をすり潰すことに専念する。どうやらこれも何かの触媒らしいが、果たしてこんなグロテスクな材料が本当に必要なのだろうか？

小麦粉とか果物とかで代用出来ると思う。そして実験が終わった後それをスタッフが美味しく頂いたら、それだけでラブ&ピースじゃないか

「研究熱心だな」

気づけばすり潰したそれを乳鉢の外に散らしていた。僕は急いでノールファさんに謝り、ため息を溢しながら後片付けを始める。

今日の僕はおかしいな。どうしても思考が逸れがちになってしまう

「……………私も昔は随分な落ちこぼれ者だった」

どうやら僕に負けず今日はノールファさんがおかしいらしい。彼が自らの過去を話すなんてこれが初めてのことだし、性格上進んでそんなことはしないと思っていた

「想像できませんね」

「だが事実だ。一時期は本当に落ち込んだよ
何故魔導師になろうとしたのかさえも見失いかけた。だがそんな時出会ったんだ」

「誰にですか？」

「我が恩師、ケインミストだ。師はそんな俺に最初何て言ったと思

うっ？」

しばらく考えて僕は前世の有名な人の言葉を思い出す

「諦めんなよ！ 諦めんなよ、お前！！

どうしてそこでやめるんだ、そこで！！ もう少し頑張ってみろよ！
ダメダメ諦めたら！ 周りのことと思えよ、応援している人のこと思
ってみろって！

あともうちよつとのところなんだから！

ですか？」

「いや全然違う。答えは『ウジウジすんなガキ！ 殺すぞ！』
だ」

……まだ見ぬノールファさんの師よ。あなたはいったいどんな人
格破綻者なんですか？

ああ、なるほど。だからノールファさんも……

「それが本当に悔しくてな。仕返しをする為に仇の近くで虎視眈々
と機会を窺っている内にいつの間にか魔導師になっていたという感
じだ」

「……………え？ 流れるに僕への慰めの言葉に繋がると思っ
ていたんですけど、どうやら違ったみたいですね」

「誰がお前を慰めるだなんて言った？」

ノールファさんは惚けて見せるが僕には分かっている。本当かジ
ョークかは分からないけどつまりらないことを言って、落ち込む僕の

沈みがちな思いを解消してくれたのだ

僕が女だったら本当に惚れてるぞ

「さあ、実験の続きを始めるぞ」

「はい！」

チリン、チロリン

呼び鈴の音がなった。

ノノールファさんに目配せされ、ドアを開けると目の前に巨大な黒い壁、いや大男の姿が

二メートルを超える大男は黒い軍服で身を堅め、短めに切り揃えた髪を四方に遊ばせている。

目が合うと後ろで手を組み、儀礼的な一礼をする様子には武道をまったく嗜んでいない僕でさえ体のブレが一切ないことが分かった

どこの国かは分からないが軍属であることは分かったのでこれは丁重にもてなす必要があるな

「ここの主、ノノールファ様はご在宅かな？」

「あ、はい。ただいまお呼びします」

客人の前では丁寧歩いて失礼のないようにしたが、姿が見えなくなる。と階段を二、三段飛ばしで駆け上った。

扉を勢いよく開けるとノールファさんに軽く怒られたが事情を説明すると顔を真面目なものに変える。今までに見たことのないピリピリとした緊張感を浮かべるノールファさんの顔が別人のように思えて少し怖かった

だけど直ぐにもとの無表情に戻り、

「お前はここで待っている」

奴隷としての命令で僕の手の甲が青く光り、体は意志に反して頷く。相変わらずこの瞬間が嫌で仕方無い

ノールファさんはドアを勢いよく閉めると、客人を待たせている一階へと降りていった

それにしても最近奴隷としての命令を滅多にしなくなったノールファさんがわざわざ命令してまで僕をここに待機させるとは……よっぽど聞かせたくない話なんだろうか？

暇になった僕はそのへんにあつた魔導書をパラパラと捲る。うん、何度見てもサツパリだ

一応古代語は読めるけど話の内容が難しすぎて理解できないから結局読めないのと一緒なんだよな

しばらく手持ち無沙汰になった僕がノールファさんお気に入り
のフワフワした椅子に座っていると、階下からノールファさんの怒
鳴り声が聞こえてきた。僕は焦って椅子から跳ね起きるが下からノ
ールファさんが上がってくる足音はしないし、未だ下の階から怒
鳴り声は続いている

「うん？ 何だ僕を怒っているんじゃないのか」

床に耳を当てて状況を確認してみると、寧ろ怒りの対象は客人で、
黙っていることをいいことにどうやらノールファさんは一方的に
怒鳴りつけているようだ。それにしてもここまでノールファさん
が感情を顕にして怒るのも珍しい

よっぽど客人が空気を読めない発言をしたのだろう

だけど客人がノールファさんの言葉を遮るように何かを言うと、
ピタッと声がおさまった。内容が気になる所だがいかんせん声が小
さくて聞き取りにくい

それでも『王国』、『魔導師』、『危機』と断片的な言葉は聞き取
ることが出来た

前二つは別にどうということもないが最後の二つは聞き捨てならな
いな。そして最後の二つが前半の二つと組み合わせることで話は一
気に最悪なものになる。『王国が魔導師によって危機に晒される』
と解釈することも可能だ………まさかな？

きつと王国の魔導師が離婚の危機とかそんなことだろう

現実では物語のように突拍子のない事件が起こることなんて滅多にない……はずだ

いつの間にか話も終わったようでコツンコツンという足音が近づいてくる。

急いでそれらしく見えるように魔導書を捲ると、眉間に皺を作って機嫌が悪そうなノールファさんが荒々しくドアを開けて現れた。勢いが強かった所為で近くに積んであった魔導書の山が二山ほど崩れ落ちる

「それを片付けたらさっさと出て行け」

何だか理不尽だが僕は奴隷、ノールファさんはその所有者なのだ。大人しく指示に従って魔導書を片付けて部屋から出ようとした

「あれ？」

「どうした？ さっさと出て行けと言っただろう」

「あの、そうしたいのはやまやまなんですけど……体が動かない」

ドアを開けて足を踏み出そうとしたところで僕の足はまるで見えないうんがそこにあるかのように踏み出すのを躊躇っていた。踏み出す足を変えてみたけど結果は同じ

この感覚何処かで覚えがあるかと右腕を見てみると、やはり奴隷の証が青く光ってその存在を主張している。最初『ここで待っている』という命令が今も続いているのだ

「ああ、そうだったな。『出て行け』」

すると僕の足がいきなり重力を取り戻し、前のめりに倒れこむ。

何故ノールファさんが改めて命令した時、言っている内容は同じだったのに最初の言葉は適応されなかったのだらう？ どうやら奴隷としての命令と意識しなければ僕の体に作用しないらしい。

そもそも言う事全てが命令として適応されれば、僕は勉強をサボらず真面目に取り組んでいるはずだ。思ったよりも奴隷の証には隙が多いのかもしれない

翌朝起きて直ぐにノールファさんに呼び出された。昨日の昨日でいったい何の用だらうと思うがどうも心当たりはない

「今日から街の剣術道場へ通え」

「えっ！？ それはまたどういう理由で？」

「いずれ分かる。それと魔導の訓練も今日から本格的にやってみよう。本気でやらなければ命令をすることも辞さないつもりだ」

ノールファさんの表情には昨日のような怒りはないがそれとは別

に鬼気迫るものがあり、奴隸の僕は無言で頷いた

稽古する奴隷（前書き）

前話の訂正後バージョンを見ておられない方は先にそっちをお読みになった方がよろしいかと…

稽古する奴隷

「セアツ！」

気迫の籠った掛け声と共に振り下ろされた木剣が僕の木剣を彼方へと弾き飛ばした

これで通算34回目だ

奇妙な客人が来て、ノノールファさんが怒りを顕にした日から一週間

街の剣術道場に通う毎日。勿論余計な争いを増やさない為に奴隷の証を包帯で隠して通っているが、争いの種は尽きない

元々この剣術道場の師範はここザルナ王国の元騎士団長だとかなかで、定年退職したとはいえ隣国では無双剣のサイフォーと恐れられている有名な人だ。その人が開いている剣術道場だから当然そこに通うには厳しい審査があり、選ばれた者は正にエリート中のエリートウオ！

そしてどうやらサイフォーさんとノノールファさんは知り合いらしくそのコネで今僕はここにいるという訳だ。

コネで入ったことから僕への風当たりは強く、こうして稽古終わり

に道場仲間から特訓という名の苛めを受けている

「おいおい剣を放すなんて剣士にあるまじき行いだぞ。さっさと拾って来い！」

そんな罵声を僕に浴びせるのは、そっちこそ剣士にあるまじき長髪じゃないか？　と思わずツツコンでしまいたくなる将来有望のニツクだ。どこぞの貴族の子らしく、戦闘の邪魔になりそうな肩甲骨まで伸びた髪を風になびかせているが実力があるのとそれが似合っていることもあり、誰も注意しない。

そして僕をからかう集団の主犯でもある

仕方なしに石床に転がった木剣を拾い上げて、剣道の真似事で左足を後ろに右足を前にして摺り足してみる。僕のおかしな構えで周りの連中が笑い声を上げ、ニツクもバカにしたように笑った。

「何だその構えは？　ただでさえ素人なのに、更に素人っぽく見えるぞ」

「これはな。僕の家に伝わる一子相伝の剣術、かみいずみ守和泉流の構えだぞ」

勿論嘘だが、それっぽい発言に動揺する連中
なんだか見たことある構えだぞ！？　と言う野次馬もいる

「ふ、ふん。ではその実力とやらを見せてもらおうじゃないか」

「見せてやるう。僕の真の実力を！」

剣道の真価はその踏み込みにある。その一步はまさに一瞬であり、鍛えられた剣道家の踏み込みはその入りが全く見えないとも言われている

僕は左足で床を蹴り、踏み込みと共に渾身の袈裟斬りをした。

数秒後、ガンツという木剣が床に落ちる鈍い音がする。木剣を最後まで握り締めていたのは……………ニツクだ！

道場に冷たい空気が流れた。あれほどの事を言っていた人物がこうもあっさりやられるとは僕以外はまったく想像しなかったことだろう。少なくとも一分以上は攻撃を凌ぐと考えたに違いない

「僕に奥の手を使わせるまでに成長するとは……………千点やるう」

ちなみにこのセリフはこの師範であるサイフォーさんの口癖『貴様に〜点やるう』からとられている。稽古終わりでサイフォーさんがいない今だからこそ出来る僕の会心のボケだ

そしてそのボケで更に連中が混乱している隙に家へと帰った。僕には君達と遊んでいる時間は無いんだ

家に帰ると直ぐにノノールファさんの授業が始まる

神力を取り込んで魔を掴み取る作業だが、最近は選択肢が数個までに絞られてきた。このどれかが魔なんだろうけどハッキリそれが魔と分かるまでは掴み取ってはいけないらしい。

間違った物を選んでしまった場合、魔導は使えなくなるからだそうだ

「今日中に魔を掴めなかったら、明日その中から選んでもらうぞ」

キツイ一言を残してノノールファさんは自室へ戻って行く。魔が掴めないと魔導の基礎にさえ入れないので、基礎すら出来てない僕は直接ノノールファさんから教わることもなくなりつつある。今ではほとんど自分一人で魔導書を読んで知識をつけるか、神力の中から魔を探し当てることにしか時間を割いていないので、実は最近通い始めた剣術道場の方が楽しくなりつつある。

とは言え、サボることは許されない。

もう二度と自分の体が動かされるあの感覚を味わいたくないからだ
バカみたいに魔導の基礎本を捲って要領を知ろうとしたし、その日は何度も体に神力を取り入れて魔を掴もうと努力した。

しまいには神力の取り込み過ぎで気絶してしまった。

なにしろその名の通り、神の力なのだ。当然人間が好きだけ扱えるほど御しやすい力ではない。

この神力の許容量がその人の魔導を扱う量とそのまま比例していて、魔を使うほどにこの許容量は少しずつ増えて行く。だがその許容量をオーバーしてしまうと僕のように気絶したり、酷ければ一病人のような状態になってしまうのだ

本当に気絶するだけで良かった

「全く考えられん！ 魔さえ掴み切れないのに神力を取り込み過ぎるとは、そんなに死に急ぎたいのか？」

二階から降りてきたノノルフアさんにもしつかり怒られてしまったが僕は終始ニヤニヤしっぱなしだ。最近他人行儀というか、実際他人なんだけど、何か僕に対して壁を作っていたノノルフアさんが久しく僕の体の心配をして、怒ってくれているのだ。

嬉しくないわけがない

「何をニヤニヤしているんだ？」

「全然してませんよ」

「……まあ、いいだろう。明日に備えてゆっくり休め。それと明日は道場に行かなくてもいいからな」

「はい！」

翌朝、いつものように朝食をとった後、いよいよ魔を掴みとる作業に入る。

念の為にノノールファさんが横で見ているがやはり緊張する。

「集中だ。集中力を欠いては成功するものも成功しないからな」

早鐘を打ちそうになる心臓を落ち着かせ、ゆっくりと深呼吸をしながら神力を取り込んでいく。もう深呼吸をしなくても神力を取り込むことは可能だが、今日は失敗が出来ないので慎重に、確実に、順序通りにやる

胸が充足感に満ちてきた。これからが本番だ

胸の中にあるいくつもの要素。聖、気、魔、その他諸々の中からより『魔』らしいものを探して行く。

毎回それらしいのが三つある。おそらくこれが聖、気、魔なのだろう

聖は神の護衛である天使が使うとされ、気は主に肉体強化の為の要素で、この世界アマタノホシに住むケット・シーやワーキャットなどの巫人や戦士タイプの人間が使う要素だ。

そしてこの力は互いに反発し合い、一度気を選んだ者が魔導師になろうと思っても無理だし、その逆もまた然りだ。

ちなみにもし僕がこの中から聖を選んだとしてもまったく何の効果も発しないし、それどころか体に悪影響を受ける可能性すらある。これだけは選びたくないものだ

「むぐん。なかなかわかりませんよ」

三つの要素の一つはモヤモヤした霧のようなもので、一つはコロコロと色を変える丸い玉、最後が清純な光りを放つダイヤモンド

個人的にはダイヤモンドが好き（金銭的な意味で）だから最後を選びたいところだが、いざそうしようと思うと他の二つが怪しくなってくる。霧の神秘的なところが魔っぽいし、コロコロ色を変えるというのも怪しい。ダイヤモンドなんかの宝石もアニメとかで魔術の媒介とされているし、一度考え出すとどれもが怪しく思えてくるのだから性質が悪い

三時間後、横から急かすようなノノールファさんの視線に耐え切れず僕はダイヤを選ぶことにした。

こういうのは直感が大事だ

英語の選択問題なんかで最初に選んだ物から変えると大抵当たってなかったりするものだ

頭の中でダイヤを掴もうとしたところ、急にダイヤが何処かに行ってしまう、その穴を埋めるようにコロコロと色を変える玉がその場所に移動してしまった。

(おいおい！ 何でこっちへ来るんですか!?)

慌てて手を止めようとしたけどもう間に合わない。手が玉に触れた瞬間、玉は姿を消してそれと同時に僕の意識も現実へ戻って行く

目を開けて直ぐにノールファさんに謝ろうと恐る恐る目を合わせると、まだ僕のでかしたことに気づいてないのか、不思議そうな顔で見ってくる

「あのおう、すみません。失敗しちゃったみたいなんですけど」

さすがにショックを隠しきれず額に手をあててため息をつくノールファさんに申し訳なくて僕は床を見下ろすことしか出来なかった。

あの時急にダイヤが動かなければ、玉がこちらへ来なければ、今更悔やんでみてもしょうがないことは分かっているけどそれでもこの行き場のない思いを解消する方法はないわけで、結局僕は悔やまざるを得ない。

「気に病むな」とだけ言い残して二階へと上がる彼の背中にはどんな思いが込められているのだろうか？

『役立たず』 『才能無し』 『所詮、奴隷』

勝手に自分でそんなことをノールファさんの心情に当て嵌めてい
る自分の矮小さ、そして少なからず彼にもそんな思いがあるのだろ
うと想像できて嫌になった。

彼は僕を信頼してくれた。けどその信頼を僕が裏切ったのは確かな
のだから

気づけば辺りも暗くなり始めていた。しばらくボーツとしていて時
間の経過に気づかなかつたらしい

灯りを灯そうとマッチを擦ってランタンに灯そうとした時、灯りが
既に二つあることに気づいた。まだランタンに火を点けてないから
灯りは一つだけのはずだ

何だろうと、そのもう一つの光っている先へ目をやると、なんと光
っているのは自分の指先だった。海のように深く青い色だ

あれ……これって……！！？

急いで階段を駆け上る。ドアを開けた瞬間ノールファさんにうる
さいと叱られても関係無しだ

「見てください。これ！ これ！」

ノールファさんは煩わしそうに僕の指先を見ると表情を変えて立

ち上がる。よっぽど興奮したせいか椅子を後ろに倒してしまった

「!?!? それは魔光じゃないか! しかし、失敗したと言ってなかったか?」

「実は自分が選ばうとした要素が直前で消えて、別の要素を間違えて選んでしまったんです。だから失敗したと思っていたんですけど……」

「その別の要素が魔だったというわけか」

僕が魔光を使った理由はおそらく、暗い中マッチに火を点けようと手元に集中したせいだろう。偶然に重なる、偶然がこのような結果を起こしたのだ

とりあえず今日はお祝いだと久しく食べてなかった鶏肉のグリルをノールファさんは夕食に出してくれた。それでようやく魔を掴めた実感が湧いてきた僕は年甲斐もなくはしゃいでノールファさんにこれからの課題をしっかりと出されてしまった。けれども、そのぐらいじゃ今日が僕にとっていい日だっていうのは変えられない

「つつたくはしゃぎ過ぎだぞ」

彼は満更でもない顔で酒を呷る。さすがに僕に飲ませてはくれなかったけど、そんなもの使わなくても気分は最高にHIGHってやつだ!

「……………よくやったな」

「ありがとうございます」

言った後で彼は誤魔化すようにボトルのお酒を飲み干した。きっとアルコールの影響でそんなセリフが自分の口から漏れたことが気恥ずかしかったのだろう

奴隷とか主人とか関係なくこの人のことが好きになってきた

十 十 十 十

気分が高揚していた僕は翌朝早く起きて料理をつくと道場へと向かった。五十畳ほどの広さの石床の上に衝撃を弱めるマットのようなものが敷かれている以外は革製の防具と木剣を除いて使用しないのがサイフォード流だ。何処の道場でも大抵置かれている木剣を打ち込む為の人形もこの道場には全く置かれていない

何でも師が言うには『人形をいくら叩いたところで何もこちらに返って来んわ。対人戦にのみ上達の秘訣が存在する』らしい

やはり朝早いこともあり、道場に人の気配は存在しない。少し早く来過ぎてしまったようだ

「良しつ、魔導については兆しが見えてきたから、後は剣術の方もしつかりしないとな」

1、2、3、と素振りをして行く。サイフォーさんは剣の握りや、足運びなんかもほとんど教えてくれない

そんなのは人と戦って行く内に分かってくるものだと、実戦と個性を重視してその人独特の剣術を伸ばしていくのがサイフォー流だ。だから厳密にはサイフォー流の型は存在しないのだけど、それでもこの道場を卒業した者は皆優秀で総じて強いらしい

サイフォーさん恐るべしだ

「精が出るな」

背後からいきなりそんな声が聞こえて驚いた。まったく気配を感じなかった……だと？

「セレスさんじゃないですか！？ どうしてこんなところに？」

声の正体は以前依頼の品を届けに来てくれたセレスさんだった。今日もまた麻のTシャツに革ズボンと男らしい服で登場してきたが、胸の部分の膨らみやお尻の丸みで女らしさもすっかり主張している。いったいどれだけ主張すれば気が済むんだ！ と思わず叫びたくなる体だ。

セレスさんはその朝露で色っぽさを増しているカラスの濡羽色の髪を頭の後ろで結んで背中に垂らしていて、匂うような色気を発散している

こんなの見せられていやらしい気持ちにならない男はいるだろうか、いやいな

「どうしたジロジロとこちらを見て？ 何か付いているのか？」

「べ、別に何でもありませんよ！！ いや、本当に！！」

「相変わらず可笑しな奴だな、君は。それといい加減その敬語を止めてくれないか？ 君に敬語を使われると何だか不自然に感じてしまうんだ」

「努力はするけど無理っばい。セレスさん美人だから」

言っている事とまったく逆な言葉遣いに思わず笑いあう僕たち

「それで結局セレスさんはどうしてここに？」

「む、まだ敬語が抜けきってないみたいだな。

……まあ、いい。一々注意してたら話が進まなさそうだからこれからに期待するでしょう

実はこの道場は私が二年前に卒業した道場だな。久しぶりに師に挨拶をしようと来たところ、君に偶然出くわしたんだ」

セレスさんがこの出身とは驚きだ。ということはセレスさんは僕の兄弟子、いや姉弟子になるのか

「君がここにいるってことは君もこの道場に入ったのか。あ、別に姉弟子とかは気にしないでいいぞ。私は師や兄弟子に敬語を使って

いたが、私自身はあまり敬語を使われるのを好まない」

「わか」　む、セレスじゃねえか」

相槌を打つ前に言葉を遮り、僕の後ろから気配も無く近寄って来た犯人はサイフォーさん。四方にボサボサに伸びている髪や無精ひげからは元騎士団長とは思えないがその実力は本物である。

「お久しぶりです師匠」

「相変わらず固いなお前は。その体のようにもっと柔らかくなれ」

一歩間違えなくてもセクハラ発言だが、セレスさんが笑っているのでセーフだろう。悔しいが現在の法律では被害者側が訴えない限り、犯人から慰謝料をとることは出来ないのだ。

「相変わらず師匠は冗談がお上手だ」

「まったく悪意が通じない相手ほど厄介なものなねえな」

憎まれ口を叩いているが珍しくサイフォーさんが嬉しそうなのが分かる。

「でセレスはこのボンクラと知り合いなのか？」

たった今僕は師からボンクラ認定を受けました！

せめてセレスさんのいないところで言っただけ欲しかったなあ

「はい。斬滅教会の依頼で知り合いました。それで、結局のところアランの点数はどうだったんですか？」

「5点だ。僕の今までの教え子の中で最低点」

最初5点と言われたとき某戦闘民族に一番初めに会ったオッサンを思い浮かべた。あの計算で言うとな僕は銃を持った人間並みに強いということになる

俺TUEEEEEEEEEEE!!

「は!?! そんなバカな、この道場に入れるだけで20点は堅いはずですよ?」

「まあちよつとした事情があつてのう。それでも見とる分には面白いから飽きんでいいよ」

セレスさんの前でカラカラと笑われるコッチの身にもなつてほしいものだ。

「師匠。そろそろ稽古の時間では?」

「あん? そろそろそんな時間か。セレスまた会おう」

「はい、師匠もお元気で。アラン、気にすることはないからな。誰でも最初は強くない、強くあろうとすることが大事なんだ」

そんな優しい言葉に思わず涙ぐみそうになるのを堪えて、去つて行くセレスさんに大きく手を振ってお別れした。少しこっちを見て笑つていたみたいだから、言葉が震えてしまつのを恐れてあえて手を振つたことにも彼女は気づいていたのかもしれない

「いい女だろう?」

「本当にそうですね」

「一ついいことを教えてやろうか?」

「何ですか?」

「セレスは強い男が好きだぞ」

「……師匠、別に師匠の言葉に影響を受けた訳じゃありませんけど、早く稽古しません?」

その日の僕は燃えた。ニツクや兄弟子達に自分から勝負を挑んで何度もボロボロにされたけどそれでもたち向かって行った。

僕のあまりの気迫に『弱い、確かに弱いんだが何だあの気迫は!?!』
『まるで温室暮らしの獣と闘っているようだった』
『師並のプレッシャーを感じるのに何故こんなにも弱いんだ!?!』と驚嘆の意を表す門下生たち

師匠がそれを見てずっと笑っているが、僕は兄弟子たちから戦闘の

コツを教わったりと忙しくて構ってられなかった

そして驚いたのはあのニツクが僕にアドバイスをくれたことだ。ど
ういう心境の変化があったのか知らないけど『ふっ、負けたよ。お
前さんには』という表情で木剣の握りを直してくれたので僕として
はとてもありがたい

本人曰く、

「お前を苛めるのもバカらしくなってきた」

らしい

「なるほど、理にかなっている」

「一応言っておくが、今のは皮肉だぞ」

そんな会話を続けているとあつという間に今日の訓練が終わった。
木剣で叩きのめされて体中が痛い。これはアザになるだろうな

準備する奴隷（前書き）

毎回「愛読ありがとうございます」

準備する奴隷

魔

魔導の発動には魔光が使われることが多い。

そもそも魔光という技術は簡単に言えば魔を集めることだ。魔導は魔を陣や古代語で操るので当然のように発動の際にこの発光現象が起こる

魔導と魔光はハンバーガーとピクルスのように切っても切り離せない仲なのだ

異論は認める

「今日の魔導講義はこれで終わりだ」

「ありがとうございました！」

最近では午前道場、午後魔導講義というハードな生活にも慣れてきた。どちらも決して優秀な生徒ではないけど、道場ではニック等の知り合いも出来たし日々充実している毎日です

ノノールファさんは僕が魔光を使えるようになってから魔導の知識をこれでもかと詰め込み、実習の機会が数える程度しかないのが唯

一の悩みだ。形から入りたい僕としては何かカツコイイ魔導が早く使えないものかな〜と思っただけ、魔導の勉強も公式だらけの物理に比べたら随分マシだしそこまでの不満はない

奴隷の身分でここまでの生活が出来るのだからこれ以上望むとガチで罰が当たりそうだ

「そういえばここ最近は何も神殿に行っていなかったな。お前も一緒に来るか？」

「お供させて頂きます」

そうしていつぞやの神殿へと辿りつくと、今回は身なりの良さそうなノールファさんが一緒にいるおかげで対応も速く、ほとんど待たずに『祝福の書』を受付に渡すことが出来た

祝福を受けた音は何度かあったけど、忙しくて祝福の書も開けてなかったのでいったいどのくらいポイントが溜まっているか楽しみだ

所有者：アラン

年齢：10 職業：奴隷

種族：人間 魔法：魔光 New

スキル：

スピード++

言語理解+

祝福

英知の神：ベイリーブ 1000pt

戦の神：クレマティス 500pt New

魔の神：アネモネ 2356pt New

.....

お、新しくクレマティスの祝福を賜っている。道場に通って毎日剣の稽古をしていた時のポイントだろうな

ベイリーブとアネモネの1000ptは古代語を覚えた時で、アネモネのもう1356ptは日々の学習のお陰だろう。新しい発見や、古代語を覚えるみたいにハッキリ達成が分かる場合は脳内で電子音と共に教えてくれるのだが、それまでの地道な努力や、それ単体ではあまり意味を為さない知恵なんかはポイントを賜っているけど脳内で知らせてくれないので知らずに溜まっている場合も多い。

確かに一々『料理を作った』『裁縫のやり方を覚えた』とかを脳内アナウンスされていたらノイローゼになってしまうだろうからその方がいいんだけど

とりあえず英知の神 ベイリーブからは1000ptの『言語理解++』。前回の言語理解+の一つ上のスキルだ。古代語を覚えたとは言え文法や速読に関してはまだまだし、魔導を扱う上で古代語の理解を深めておいて損はない

クレマティスに関しては、まだ500ポイントと少ないこともあり
放置

『剣術+』のスキルなんか魅力的だが実際の名剣も手に入れるこ
とが出来るのが大きい。これからのポイントに期待するでしょう

アネモネは1000ptずつの『詠唱+』『魔操作+』のスキルを
選んだ。『詠唱+』はその名の通り古代語の詠唱を速くして魔導の
発動を早める効果がある。『魔操作+』は魔導について一番重要な
それぞれの魔導において必要分だけ魔を陣や詠唱と共に送り込む量
やスピードなんかを補佐してくれるスキルだ

これで内心強くなったと思っていた僕だけど偶然隣のノールファ
さんの祝福の書の中身が見える位置にいたので、悪いとは思ったが
こっそり見させてもらうと直ぐに愕然とした

魔法欄、スキル欄がビッシリ埋まっていて祝福の方もベイリーブと
アネモネがそれぞれ50000ptも溜まっている。いったいどれ
ほど研究したらここまで溜まるものなんだろう？

「ん？ 何をジロジロ見ている？ そんなに自分のを見せてもらい
たいのか？」

「いや、全然ちがつ　って！？　勝手に見ないで下さいよ！！」

「ふふん。中々良いスキルを選んだじゃないか。その位の歳だと
もつと剣とか杖とかを欲しがるものだと思っていたが想像以上に堅

実だな。まったく……つまらん奴だ」

「そんなの自分の勝手でしょう！」

「若い内から逃げてどうする？ 考え方がオッサンなんだよ、お前は」

「酷い！ 横暴だ！」

「ほう。人の祝福の書を見るのは横暴じゃないのか？」

「ばれているだど！？ 自分がした手前何も言い返せないじゃないか！」

僕が何も言えずに黙っているとノールファさんはクッククックと邪悪そうな声を上げてご満悦の様子。受付嬢は何故かそんなノールファさんを見て頬をポツと赤らめている

これが生まれ持った容姿の違いってやつか。悔しいという気持ちすら起きないほどの圧倒的な敗北。もう好きにやっつけてください

「そつむくれるな」

そんな気も知らず嫌がる僕の頭をガシガシと荒っぽく撫で付ける。受付嬢が『薄い本が出ないものかしら』と何やら腐ったこと言っているから本当にやめて欲しい

そついえば前世で聞いた話だけど、女子がBLを好む理由は男子が百合を性的なものとして喜ぶのとは違い、あくまで萌えとして好む

らしい。だから何だって話だけど……

「全然むくれてなんかいないんだからね！」

「……今日のメシを抜きにされたいのか？」

「真に申し訳ありませんでした！」

「よろしい」

やはりノールファさんは優しい。だからこそ怖いんだ
今現在僕が奴隷だと知っているのはノールファさんとあの時の騎士、パン屋のおばさん、そしてストリートチルドレン時代の仲間、いやもう仲間じゃないんだっけ。とにかくそれぐらいだ

それ以外の人。セレスさんや師匠、ニツクや道場の人たちは僕が奴隷だと分かっただらきつと態度を変えてしまっただろう

奴隷だと分かって優しく接してくれるノールファさんの存在に僕は、精神的にも生活的にも依存している状態なのを言うまでもない。だからこそノールファさんがいつかなくなってしまうんじゃないか、いつか本当に奴隷としての扱いをされるんじゃないか、そんな不安が寝る前や、ふとした時に浮かんできすぎてすごく怖い

その時ばかりは見た目そのままの子供らしく泣いてしまうこともある。

結局僕は弱いのだ。情けない位あらゆる面において

もう少し僕は強くなろう、精神的にも肉体的にも。誰にも何にも負けないくらいまで強くあるうとは思わないし、思えないけどそれでもなんとか理不尽な出来事に抵抗できるくらいまでは強く……

その知らせはあまりにも唐突だった

剣術道場にも一ヶ月精を出して通い、モンスターから身を守るための魔導を身に付け始めたころノールファさんが夕食終わりに父親が「最近学校ではどうなんだ？」とでも話しだすかのように、「明後日この街を出発する。準備をしておけ」と軽いノリで言い出したいきなりのことでまともな反応が出来なかった僕は

「え……？ 明後日？ 僕が？ 俺がお前で、お前が俺で！？」

と仰々しいほどにうるたえる。そんな僕を他所に椅子に深く腰を下ろしたノールファさんはあれやこれやと思考を廻らしているようだ

「明日は馬車や外套、ランタン等の旅具、日持ちの効く食糧を調達しなければいけない。後でリストに起こすから分担して買い付けに行くでしょう」

「ちよつ、いきなり過ぎませんか？　今までそんな話一度も…」

「一度も言つてなかったからな」

あつ、これは駄目だ。何が原因かは分からないが、今のノールフアさんは以前軍人の客が来た時以来のやたら冷たく機械的な時のノールフアさんになってしまっている。今僕が何を言つてもきつとまともに取りあつてくれないだろう

こういう時は余計なことを言わず、ただノールフアさんの機嫌が早く直ることを祈るしかない

それがノールフアさんとの短い付き合いで僕が得た処世術だ
夕食の片付けが済むとソファの上に体を投げ出す。そういえば行き
先も聞いてないし、滞在期間も聞いてないや。さすがにこの家には
貴重な魔導書がたくさんあるから帰ってくるとは思うけど、あのノ
ールフアさんの様子じゃあこの街から出て行って戻らないという
ことも充分に考えられる

何にしても明日が来てからだけど

その朝はあつという間にやってきて早速買い物リストをノールフアさんに渡された。

リストを見るに僕の担当はどつやら食糧らしい

塩、干した野菜、干し肉、日持ちがいいようにカツチ力チに焼かれたパン。とてもじゃないがこのままでは歯がたちそうもない、そんなことを僕の表情から読み取ったのか店員のお姉さんは親切にもこのパンはスープか何かに浸して柔らかくして食べるということを教えてくれた

後リストには載ってなかったが店員さんのお勧めで干し飯に良く似た物を紹介されたのでそれも買っておいた。ちなみに干し飯とは炊いた米を水で軽くさらした後に天日干したもので、これもパンと同じく水に浸したり、水と共に炒めたりして食べることが出来る。元日本人の僕としてはこういう味に飢えていたので、ノノールファさんに怒られることを覚悟して買ってしまった。

買った後に昨夜のノノールファさんの顔を思い出して後悔してしまつたがもう遅い

(この世界にはクーリングオフ制度がないので当然)返品出来ませんと言われたときには、先ほどの優しそうな店員の顔が悪魔に見えた

買った量が量だったので、店の人に買ったものは家の前に届けておいてくれと頼んだ僕はトボトボと帰宅する。しばらく大通りを歩いていると目の前から暑苦しい長髪の持ち主の見覚えのある顔がやって来た

「やあ、ニコラス」

「……僕の名譽の為に言わせてもらうが、僕の名前はニツクだ！」

「ハハツ。相変わらず元気が良いなあニコラスは、何かいいことでもあったのかい？」

「君がまた僕の名前を間違えていることと、どこぞの金髪アロハシヤツのおっさんか！ のどっちの突っ込みを君は僕に期待しているのかな？」

「しいて言うなら一人称が『僕』で被っていることを鑑みて、君だけの新たな一人称を考えて欲しいな。一人称が被っていると書き分けがすごく難しいんだ。特徴的な語尾でもいいよ」

「あれ、人の話聞いてた？」

「そんないつも通りのやりとり。ニツクには前世のネタも話したので対応も慣れたものだ」

「突然だけど、ニツク。明日からしばらく旅に出ることになったんだ」

「！？ 本当に突然だな。何時ごろ帰ってくるんだ？」

「たぶん一ヶ月ぐらいは……」

僕が先ほど調達した食糧だけでも十日間分はあった。ノノールファさんが何処へ向かうかは知らないけど行き先は少なくとも衣食住が

揃っているところだろう。目的地に着いたとしても直ぐには帰らないだろうから、帰る時間も合わせると一ヶ月ぐらいはかかる。勿論旅の途中で食糧の補給をしながら進んだり、あまり滞在しない場合も考えられるからそれい以上かもしかれないし、それ以下かもしかれない

『僕も昨日に聞いたばかりで詳しい話はよく分からないんだ』と説明するとニツクは納得がいかないながらも頷いた

「何にせよ、早く帰って来いよ。また鍛えてやる」

「じゃあニツクが老いぼれて剣も持てなくなった頃に帰ってくるよ」

「フフツ、……またな」

憎らしい笑顔をするニツク

「ああ、また」

そのまま別れたけど出発前にニツクと話せて少し元気が出た気がする。すっかり機嫌を良くした僕がノールファさんに貰ったリストをピラピラさせながら歩いていると、

「あれ？ このリスト裏側にも何か書いているぞ。何々……護身用の剣？」

そう、リストの裏に護身用の剣と達筆で書かれていたのだ。ノールファさんもわざわざこんな所に書かなくていいじゃないか！

「まあ、それがノールファさんだからなく。仕方無い、ちょうどクレマティスのポイントが2000ポイントあった筈だからそれで適当な剣でも交換してもらおうかな」

そのまま神殿で1700ptの剣と交換してもらった。1000ptの剣もあったけど量産の鑄造で質もあまり良くないものだったので、少し値は張るが1700ptの鍛造の剣と交換してもらった。

使用者の腕が良くないので、せめて剣だけではという考えだ

家に帰るといつも以上に無表情のノールファさんが、僕が買った食糧品が積まれている荷車の前で僕を待っていた。そういえばニツクに会ってすっかり忘れていたけど、さっきの店でリストに書かれていない干し飯まで注文してしまっていた

こちらをただジツと見つめるノールファさんの元へ恐る恐る近づいて、一定の距離にまでなると僕は土で汚れるのも躊躇わず地面に平伏して土下座をした。

これが日本が世界に誇る文化、ジャパニーズ・ドゲザだ！ この最上級に土下寝という奴があるらしいが、それはえてして全く逆の意味を持つことになるのでここでは土下座こそが正解

いきなりの土下座に頭上でノールファさんが驚く気配を感じほく

そ笑む僕。

外人はいきなり土下座されると、DNAから感じ取るそのあまりにも深い謝意に困惑してしまつらしい。最もそれは日本人でも一緒だ
けど

「なっ！？ いいから起き上がれ！ なんだが酷くすまない気持ちになるだろう！」

「いえ。私めはこうして地面に頭をつけて生きていくのが相応でございます」

ノノールファさんの屋敷は街の外れにあるとは言え、人通りは少ない。通り過ぎる人たちは足を止め僕に哀れみの視線を、ノノールファさんに抗議の視線を送る。

完全にアウエーな空気に耐え切れなくなったノノールファさんが

「分かった！ 勝手な買い物したことを許そう！ だから顔を上げてくれ」

苦し紛れに言ったその一言で僕はガバツと顔を上げる。言質はとつたのでもう恐れる必要はない

『クツ、騙したな』『何のことですか？』

視線でそんなやり取りをした後、さすがに僕もギャラリーの視線に耐え切れなくなって二人で家の中に逃げ込む

急いで逃げたせいでハアハアと荒い息をする僕達。何だかそれगतてもおかしくて僕が噴出すと、それに続いてノノールファさんも笑い出した。

息がしんどくなるぐらいまで笑い転げた僕達は互いに向き合った。ノノールファさんは灰色の髪を乱し、笑いすぎて涙の痕がまだ顔に残っている。おそらくそれ以上に笑っていた僕の顔は今とんでもないことになっているだろう

「……すまなかつたな」

おそらくここ数日までの態度のことだろう。さすがにノノールファさん相手に茶化す気にもなれなくて僕はただ頷いた。彼もそれだけで満足だったようだ

彼が何にイライラしていたか、それはまだ分からないし、これから先も分からないかもしれない

僕はそれでも彼を信じたいと思う

旅する奴隷（前書き）

あれ？ 文章力が……

旅する奴隷

早朝、まだ小鳥のさえずりすら聞こえない薄闇の中僕はノノールファさんに起こされた

寝ぼけてしばらくボーツとしていたが、しばらくして今日が出発の日だということに気づくとノノールファさんに奴隷の焼印で急かされながら急いで準備に取り掛かる

カーキ色のパンツに紺色の動かしやすそうなシャツに着替えると、昨日ノノールファさんに買って貰った外套をその上から羽織る。まだ春先なので空気は冷たい

ノノールファさんのお古のせいか少々腰回りが緩いパンツをベルトで締めると、ベルトに昨日ポイントで交換した飾り気の無いロングソードを差し込んで、革ブーツの紐をしっかりと結べばとり合えずの身支度は完成。

一応抜剣してみたが違和感なく引き抜けるのでいざという時にも問題は無いだろう

同じく旅用の丈夫で身軽な服を着たノノールファさんと軽い朝食をすませば早速馬車に荷物を積み込む。二頭立ての馬車に少なくない量の荷物を積み込むと少し車体が沈んだ気さえする

そこはノノールファさんが大丈夫だと言っていたので大丈夫と信じたい

……果てしなく怪しいけど

「馬車の操り方を教える前にまず馬の乗り方を教える必要があるな」

「ええ、馬車の操り方だけで大丈夫じゃないですか」

「ほう。ならもしも馬車の車輪が壊れた時には、一人おいていかれることになるのだがそれで良いのだな？」

グウの音も出ないとはこの事だ。結局ノノールファさんのスパルタ教育によって三十分もしない内に乗馬の基本を叩きつけられた。一応なんとか乗れるようにはなったが、乗っているというよりかは馬に乗せられているという感じが強い

「まあその程度乗ればいいだろう」となんとかノノールファさんから合格を貰い、ようやく馬車の操作方法かと思いきや「後は乗馬の応用だ」とおっしゃりやがった！

何ですかその説明は！？　一を聞いて十を知るような頭の持ち主ではないのだよ僕は！

勿論そんなことはいえないわけで、適当にやってみると案外簡単に出来た。馬自体がもともと賢いのか、それとも僕の隠された力が覚

醒したのかはともかく馬は軽く手綱を引いてやると進んで欲しいと
ころに進んでくれた

「でどつちに行けば良いんですか？」

この街オルベスクはザルナ王国の首都から南の方向にあり、西へ進
めば大森林地帯に、東へ進めばこの大陸の半分近くを支配するウエ
スベニア帝国、南へ進めばこの世界には珍しい共和制のバノン共和
国など行き先は選り取り見取りだ。

ちなみにこの大陸の名はアーガータ。三大陸の内が一番大きな大陸
で多種多様の種族が住まう。他にも常に海洋を移動し続ける移動大
陸テレジア、はるか上空に浮かぶ浮遊大陸オスタラなどの大陸があ
る。

「東門から出てナル川沿いを真っ直ぐ進め」

東門ということとはウエスベニア帝国の方面か。帝国とザルナ王国は
数年前から国境近くで小競り合いが起きていて、いつ戦争が起こっ
てもおかしくないとニツクから聞いている。
そんな危険な場所に行ってノールファさんはどうしようというの
だろうか？

少しは僕に今回どういう訳ではっきり何処へ行くのか教えてほしい
そんな僕の不満が顔に出ていたのかノールファさんはいつもの無

表情で

「どうした？ 街道沿いはモンスターが出難いとはいえ、まったく出ない訳ではないんだぞ。集中しろ」

とキツイ一言。秘密主義がかっこいいのは絶賛厨二病の僕にも分かるがここまで隠されると本当に何かあるのではないかと疑ってしまう

いや真面目な話、実際何かがあるから僕に隠しているんだろうけど。本人はこういう時も魔導書から目を離さずにいる。さすがに周囲を全く警戒してないわけなので探知魔導を用いているのだろうけど、もう少しこちらに協力する格好をして欲しいものだ。何せこっちは慣れない手つきで馬を操りながら更にモンスターや盗賊なんかの警戒をしなければならぬ。少しでもノールファさんが素敵の素振りを見せてくれれば精神的に楽になるんだけどな

チラチラとノールファさんに子犬のような視線を送ってみたが彼はまったくの無視を貫いている
僕は全く隠さずに重い息を吐いた

馬車を走らせて昼ごろにはナル川の中流に位置するサレマ湖に到着。サレマ湖付近はこの世界には珍しくモンスターの類が存在しない。

準聖地と呼ばれる場所でモンスターの嫌がる鉱石成分が含まれている特殊な土地だ。その為準聖地の多くには都市や街が建てられているが、ここが準聖地たる所以はその鉱石成分が水に解けこんでいるかららしい

人間には害がないし、兎に角美味しい。ミネラルが含まれていて硬水の筈なのにこの喉越しの良さ！これが異世界の不思議の一つなのか？

動物の皮で作られた二つの水筒にコポコポと水を汲む

少し肌寒いが、春の日に照らされ湖面がキラキラと輝く様子は絶景。これが旅の途中じゃなければこの湖の近くで生涯を暮らしたいと本気で思ったりする

「さっさと行くぞ。今日の道程はまだ半分ほど残っている」

再び馬車を操り始めて二時間、その異変に最初気づいたのはノノールファさんだった。

「おい、馬車を止める」

「えっ！？ わ、わかりました」

僕は街道沿いの横の開けた地に馬車を誘導して止める。突然なんだろう？

異変は感じないがノールファさんの言う事だ。止めた理由は決してトイレではないはず

「一体何ですか？」

「前の茂みをよく見てみる」

彼が言っているのは街道の横の森から街道側に突き出た茂みのことだろう。ジッと見ていると茂みが時々ガサガサと蠢いているのが分かった。

何かいる？

ひよっとして待ち伏せか？

「探知魔導で分かったのは人型で四体のモンスターということだ。このあたりのモンスター分布からすると十中八九ゴブリンだろう」

モンスター。太古の時代から湧き続ける人類の敵

その種類は人族と同様に様々で人型系、アンデッド系、鳥系、ビースト系、植物系、虫系、邪霊系、ドラゴン系、非生物系 e t c . と数え切れないくらいいる。

そしてこのモンスターが人類の宿敵足りえているのはその強力な力だけではない

彼らは進化する生物だ。彼らの殺戮（他のモンスターや人間を含む）は自身の能力を高め、ある程度まで達すると別の生物へと進化することが可能になる。

例えばこのゴブリンなんかは人型系の中で最弱の代表的な存在だが、進化するとホブゴブリンという通常のゴブリンが五匹かかっても倒せない強い存在へとなる。更に進化するとゴブリンキング、オーク、オーガ（鬼）へとなり、それまでの環境や食べ物、特殊な条件によつては進化する先が変わってきたりするのだがそれを一々説明するときにキリがないので今は割愛させていただこう

〈閑話休題〉

そしてこの人型系の基本であり始祖であるゴブリンの段階を一期と呼ぶ。そこから進化することに二期、三期へと変わっていく。この一期や二期なら通常の武器で殺せるレベルなのだが、三期になってくると通常の武器はほとんど受け付けなくなり、それに対抗するには魔や気が不可欠。

この点と、どういう訳か諸悪の根源たる一期のモンスターは何度絶滅させようと国家間規模で討伐しても再び何処からか湧いてくるおかげで、過去この大陸で戦争が起きたことが数回しかないのは皮肉といえよう

話は長くなつたが、今ここで重要なのはどうやってゴブリンの待ち構える場所を突破するかだ

馬車の勢いで切り抜けても轍を目印にして追ってくるかもしれないから、今殺したほうが安全なんだけど……

「高名なサイフォー剣術道場に通う腕を見せて貰おうか？」

「い、いや無理ですって！」

一対一なら、サイフォーさんに五点と評された僕でもゴブリンに勝つことは出来るだろう

そのくらいゴブリン単体は弱い生物だ。だが一度ゴブリンが群がれば歴戦の騎士とてそう簡単に討伐することは出来ない

数は暴力という言葉はこの世界でも変わることはないのだ

それでも四体ぐらいなら少々腕に自信のある奴ならそう苦勞もしないで倒せるけど、僕にそんなものがあるはずがない！

「……仕方あるまい。お前はモンスターと闘うのは初めてなのだろう？」

コクリと頷く。物心ついた時からあの街オルベスクで暮らしてきた

僕は城壁の上から遠くにいる鳥系のモンスターを見たことがある程度で、先ほどの知識もノールファさんから教わったものだ。

正直実戦を考えただけで太ももがピクンピクンと震えてきてしまう。何せ幾ら弱いとはいえ奴らは殺意むき出しで僕達の命を狙ってくるのだ

怖くないはずがない

ノールファさんが僕を見つめる無表情な顔にほんの少しだけ慈しみの感情が見えたが、それは直ぐに表情から消えた。きっと僕の勘違いだったんだろう

「なら石をあそこの茂みに投げてゴブリンをおびき寄せろ。後は私がやる」

言われるまま、手の平に納まるぐらいの大きさの石を拾い時速160km級の豪速球で投げつけた

あくまで気持ちだけだった僕の投げた石は大きな弧を描いて、それでも目標の茂みへとガサツと落ちる。良しっ、結果オーライ！

「グギャツ！」「ググウ！？」

驚いた声がする茂みに更に投石を開始する。しばらくするとさすがに投石攻撃に耐えかねたのか茂みから次々とゴブリンが飛び出してきた。

体つきは老人をそのまま赤ちゃんに変えたかのように背筋は曲がり、とんがった耳、醜悪な顔、頭には毛が生えてなくツルツルだ。申し

訳程度に股間をボロ布で隠し、それぞれの手には棒つきれや錆びたショートソードが握られている

奴らはそのまま投石を続けようとしていた僕を見つけると怒りの声を上げながら走ってきた。

急いで僕は馬車の荷台の上に立つノールファさんの後ろまで上り、その頼りがいのある背中に隠れ、僕とゴブリンとを遠ざける壁兼盾にする

彼は一度煩わしそうにこちらを見たが、そのまま何も言わずに指先の魔光で空中に陣を描きながら古代語で詠唱する。

陣が完成した印に一度光ると、陣の中から何かがもの凄い勢いで射出され、馬車に飛びかかろうとしていたゴブリンの体が揺さぶられる。

ノールファさんの後ろに隠れていた僕が何が起こっているのか分かった時には既に辺りに動くものはなかった。

そこにいたのは腹の真ん中を氷で出来た槍によって串刺しにされている四体のゴブリン。

そのゴブリンの目にはまだ光りが少し残っているように見える。自分がいつ死んだか分からないほど素早くノールファさんの魔導によって殺されたのだろう

「ゴブリンの魔珠はほとんど二束三文だが、ちょうどいい機会だか

ら魔殊の剥ぎ取りを経験しておけ」

前にも言ったようにモンスターは魔の製造機たる魔殊が体内に存在する。しかもそれは大抵生きていく上で一番重要な心臓にあることが多い

つまり魔殊を採取するには少々グロテスクな行為を覚悟しなければならぬのだ。

「そんなに嫌そうな顔をするな。誰だって好きでやる奴はいないんだぞ」

「それは分かってますけど……」

前世でこんな死体を見ることもなかったし、動物ならまだしもゴブリンは人型だからどうしても人間の死体を連想してしまい、喉の奥から酸っぱいものがこみ上げてくる

さすがにゴブリンを殺して貰った手前、再びノールファさんに頼るのも情けないので吐き気を堪えながらナイフで皮を、臓物を切り裂いていく。

時折ビュツと溜まった血液が噴出す度に軽い悲鳴を上げながらもなんとか魔殊を取り出すことに成功した。見た目は黄色く濁ったビームのような感じだ

「どうだ。簡単だろう？」

「ええ思ったよりは。でもしばらく肉が食べなくなりそうです」

魔導と奴隷（前書き）

いつの間にか日間ランキング一位に
慢心せずに努力していきます

魔導と奴隷

荒野のど真ん中

視界に移るのは夕焼けの空を飛ぶカラスと赤茶色の大地。あとは木が申し訳程度にあるぐらいで随分空しい

そんな場所が今日の僕達の野営地だ

ノノールファさん曰くモンスターや盗賊の発見が容易になるのだからざとこうして開けた地で野営するらしい。その分こちらが見つかりやすくなるんじゃないですかと尋ねてみたところ、不意打ちされるよりはマシだろうと諭された。

なるほどな。でもその作戦はモンスターや盗賊が真正面から襲ってきてても充分対処できるという自信がなければとても出来ない芸当だ。だってことに本人は自覚があるのだろうか？

きっとこの無表情で端正な見た目とは裏腹に心臓が毛でビッシリと覆われているに違いない！

「おい、これからテストをするぞ。モンスター避けの魔導陣をだいたい半径三メートルの大きさに書け。もしミスしたら今晚のメシ

は抜きだ」

僕の心の声を読んだかのようにノールファさんは厭らしい笑みを浮かべながらそう告げた

モンスター避けの魔導陣。この世界で旅する上で必ず必要になってくる陣だ

効果はその名の通り周囲のモンスターを近寄せない至ってシンプルなものだが、これがないとモンスターの動きが活発になる夜の野営は死を意味する

魔導の使えない一般人は金貨一枚、およそ三万円ほどの魔導陣が描かれた布を買わなければ満足に旅が出来ないというのだから、この世もやはり金だと改めて思う。

そして僕達魔導師は主に染料や地面に溝をつけてこの魔導陣を描く。前述の魔導陣を描いた布を使ってもいいのだけど、その場合は特殊な触媒を混ぜた染料を使わなければいけないやら何やらで意外とお金がかかるのだ。

だからこそ効果時間は一日足らずの簡易的な魔導陣でもお金がかからないほうを選ぶのは当然と言える

今回は染料がないのでそこらに転がっていた棒切れで地面に溝をつくり代用してみる

まずノノールファさんに言われた通り、棒で野営地を囲むように地面をガリガリと削り半径三メートルほどの大きな円を描いてその中に幾何学模様と複雑な古代語を付け足していく。

この位置関係や古代語の内容がこの魔導陣の胆らしいが、別に内容が分からなくても正式な手順さえ踏めば魔導は発動するので僕は内容をほとんど覚えていない

空で描けるようになるまでノノールファさんに何度も書き取りさせられたのでミスはないと思うが、今晚のメシが懸かっているのだからチエックしておく

……… 良しつ、大丈夫だ！ 見た限りミスはない

だがここで油断してはいけない。ここまではあくまで下書きの段階なのだ

僕はゆっくり呼吸をして左手の先に魔光を集めると、棒の先に左手を当てて魔光を宿していく

熟練になれば左手を介さなくてもそのまま持っている物の先に魔光を宿せるらしいが、僕はまだまだ未熟なのでイメージしやすい体の一部から間接的に魔光を宿すことしか出来ない

棒の先に青白い光りが宿ったことを確認するとそのまま下書きした陣を棒でなぞりながら、陣の中に描かれた古代語を復唱していく

ノノールファさん曰く下書きした上からなぞる僕のやり方は邪道らしいが、唯でさえ複雑な魔導陣を描きながら古代語を復唱し、魔光を宿らせるなんてそれどんな無理ゲー？

（おそらく）マルチタスキのスキルを持つノノールファさんにしてみれば僕のやり方がまどろっこしいのだろう

もしノノールファさんがマルチタスキのスキルを持っていないでその発言をしているのだとしたら全僕が泣くことになるので、もうあまり考えないようにしよう

今集中すべきは目の前の魔導陣なのだから

汗を流しながら全ての部分をなぞり終わると魔導陣全体が一度青く発光して消えた。

この反応は成功の印だ。どうやら無事に完成したらしい！

「ノノールファさん出来ましたよ！」

「見れば分かる」

彼は僕が喜び勇んで言ったセリフをそうアツサリ流し食事の支度に取り掛かる

はしゃいでいた自分が急に恥ずかしくなっ僕はそれを隠すかのよ
うにテントの設置に取り組む。

少しぐらい褒めてくれてもいいだろうと内心思いながらの作業はテ
ントの仕組みを良く理解してないこともあって、思うように進まず
ノノールファさんが夕食を呼ぶ声でやむなく中断された

今日の夕食は鍋で水と一緒に煮込んだ干し肉と野菜クズのスープと
パン

うん味気ない。やはり味噌汁が僕のソウルスープだ

そのままモソモソと食べているとノノールファさんが

「今夜の見張りは最初私がやろう。三時間程で交代だ」

とパンをスープに浸しながらそんなことを告げた

「分かりました」

いくらモンスター避けの魔導陣をしていたところで強いモンスター
は僕達の姿を見つけると襲ってくる可能性もあるし、何より一番警
戒したいのは盗賊だ。

あくまでこの魔導陣はモンスター避けの為のものなので人はあつさ
り通してしまうばかりか、地面に書かれた魔導陣を消されるとモン
スターの脅威も加わり更に危険が増す

誰かが見張りをするのは当然のことだろう

夕食の後汚れたお皿を洗う為に貴重な水を回すことはできないので、馬車に適当に重ねて放置。今度水場でも見つけたらその時に洗う事にしよう

それが済むと今度はノノールファさんと協力して不恰好ながらもテントをたてる

「もし何か少しでも異変を感じたら私を起こせよ。何でもなかったとしても怒りはしない」

三時間後に外で見張っていたノノールファさんがテントに入ってきて、そっぴい残すと、毛布にくるまって寝転ぶ

初めての野宿で緊張し全く眠れなかった僕が外へ出ると直ぐにその光景が目に入った

「うわぁ綺麗だ」

そんな言葉が自然と漏れてくる

目に映るは満天という言葉ですら表せないほどの星。しかもそのどれもが地球で見たものより鮮やかにハッキリと見える。北極圏でさえこころは見えないだろう

一通り眺め終わると

明かりに目が慣れないように焚火に背を向けながら腰を降ろす
星明かりのおかげで辺りの様子がボンヤリ見えるので余計な気遣い
もしれないが、油断はしないほうがいい

周囲の注意が足りなくて後ろからバツサリというのは勘弁だ

「それにしても眠いな。寝なきゃいけない時に寝れなくて、寝ちゃ
いけない時に眠たくなるのはいったいどうしてなんだろう？」

実際ここで寝てしまったら起きたノールファさんにあげつないこ
とをされるだろう

寝ちゃダメだ。寝ちゃダメだ。寝ちゃダメ……………だ……………

肩を揺さぶられる

ハッ!? ……どうやら僕はすっかり眠っていたようだ。きっとノールファさんと交代の時間が来たのだろう

急いで閉じかけの目を開いて振り返り謝ろうとした瞬間、頬の熱い痛みと共に後ろへ吹き飛ばされた。

某解説者風に言うと

アランくん、吹っ飛ばされたー！ という感じだ

確かに悪いのは僕だけど殴らなくてもいいんじゃないかとノールファさんに告げようとして僕はそのことにようやく気づいた。

僕を吹き飛ばしたのは闇夜に溶け込む全身黒服姿の男。顔も目だけを残して黒い布で隠す徹底ぶりだ

さすがにこれが変装したノールファさんだっと思えるほど僕目は腐ってないので、ある一つの推測がされる

つまりこいつらは盗賊か

あの時寝てしまった自身の迂闊さに吐き気さえするが今更どうにもならない

今僕が出来るのはどうやって盗賊を追い払えるか、逃げられるかをちっぽけな脳で考えることだけだ

とりあえず状況把握。

どうやら襲撃者は僕を攻撃した男一人だけではないらしく、同じ格

好の何人かがノールファさんの寝ているテントの中に侵入して
くのが視界の端で見えた

さすがにノールファさんでも寝ている最中に攻撃されたらどうし
ようもない

とりあえずノールファさんを助ける為には目の前の男を倒さなけ
ればいけないことは確か

僕のへっぴょこ剣術が何処まで通用するかは分からないけど、ここで
何もしないなんて選択肢は倫理的に存在しない。ノールファさん
と僕の関係は主人と奴隷だけど、その前に僕にとっては恩師なのだ。
もう逃げるといふ選択肢は残されてなかった

幸い僕は見張りの時に帯剣していたので……あれ？

剣がない！？ いや、それよりも前に僕の体は縄で身動きがとれな
いように縛られているではないか
道理でさっきから立ち上がることも出来ないわけだ。

そんな風に冷静に現在の状況を確認している僕の心理状態から、人
間っていうのは本当に危機的状況に陥ると落ち着くってのは事実だ
など実感する

やばいつー！！

黒服男が身動きのとれない僕に振り下ろした剣を必死に体を捻じ曲
げて避ける。やはりさっきの説は嘘だ。今の僕の心臓はバクバク言

っているもの

「チツ、外したか」

悔しそうに言い放つ男。

「生かせてやろうと思ったんだけどよ。お前が正直に俺の手刀を受けて気絶しなかったのが悪いんだぜ」

男がそんな嬉しくないことを言っている間に僕は芋虫のように這って少しでも男から距離をとろうとする。ノールファさんを置いて逃げるのはつらいが、人はやはり自分の命が一番大事なのだ

最初の『恩師だから逃げるといふ選択肢はない』という言葉の前半部分は嘘偽りないが後半はあくまで建前であり、心の叫びであることを賢い読者の皆さんは理解してほしい。そしてノールファさんは頼むから僕を怨まないでくれ

そんな主人不孝者に罰が当たったのか、あっさり男の足に踏んづけられ、固定された僕を見下ろして男が布越しに軽く笑った

「最後に言い残す言葉は……？」

「たとえ僕を倒してもいずれ第二、第三のアランが 「死ね!!」

「ちよっ!?!? 最後まで言わしてっ!」

男が喉を狙って振り下ろして来たナイフは轟っという音と共に僅かに切っ先がズレて、僕の首の薄皮一枚斬り裂くだけで終わった

その轟音のした先を見るとテントが青白い炎によって包まれていた。テントを襲っていた襲撃者も体についた火を消そうと地面に擦りつけていたが、火は消える様子を全く見せず襲撃者は黒っぽい塊となつて動かなくなつた。辺りには人の焼けた嫌な臭いが漂う

僕も、目の前の男でさえも想像だにしない出来事がどうやら起きたらしい

あの中にはまだノールファさんが残っていたと言うのに……
しばらく現実を受け入れられず呆然とする

だが目の前の男はプロらしく、仲間の死体に軽く一礼すると当初の目的を達成しようとナイフを振りかざす

最初のような奇跡はもう二度と起きない。あの時はまだ死ぬことを実感出来ていなかったが、襲撃者の男たちやノールファさんがあっさり死ぬのを見ると現実がよりクッキリと形を持って迫ってくる

嫌だ、死にたくない

目に熱いものがこみ上げてくる

物語の主人公たちのように困難を乗り越えることなんて現実ではありえない。あの強いノノールファさんのように人はあっけなく死ぬのだ

「グフツ」

突然男の口から黒っぽい血が溢れてきて、僕の体の上に倒れた男の背中には青い炎で出来た矢が刺さり男の体を焼き尽くそうとしているのが僕にも見て取れたので、火が燃え移らない内に急いで男の脱力した体から抜け出す

「無事か？」

声の先には服が少し煤けてはいるが元気な姿のノノールファさん！？
掌には人魂のような青い炎が握られている。おそらくあれでさっきの男を攻撃したんだろう

「ああ、ノノールファさん！？ 生きていて良かった！！」

「途中、逃げようとしていたのを見ていたぞ。それに見張りの最中に寝るとは何事だ。貴様の頭には脳みそが入っているのかも疑わしい」

ノノールファさんは髪を片手で掻き揚げながら僕にズバツとキツイ

一言を突きつける

僕はそんなノールファさんらしさにさえ喜びを覚えるほど、ノールファさんの生存が嬉しくて思わず飛びつく。精神が肉体に引かれているせいか、感情の表し方が我ながら子供っぽいとは思うのだがこの喜びを表す方法はそれ以外に思い浮かばなかった。

決してBLではない！！

あれだ、子供の頃憧れのお兄さんに思わず飛びついてしまうような感覚だ。無ければ記憶を捏造したまえ

ノールファさんは僕の気が落ち着くと、直ぐに野営地を変える準備を始める

魔導陣もすっかり盗賊の手によって荒らされ、人の死体が転がっている状況では安全上と精神衛生上寝るのに適していないことはハッキリしていたので僕も進んで手伝った

不幸中の幸いとしては馬車の荷台も、馬も盗む予定だったのか全く壊されていなかった

被害はテントとその中に入っていた食糧品数点だけだと考えるとその状況は悪くはないのかも

「盗賊にしてはやたら統率が取れていたな。食糧も荒らされている様子は無いようだ」

「僕達を殺してから荒らす予定だったのかもしれませんが」

「……そうかもしれないな」

ノールルルファさんが能面のような表情に戻るのを僕は見た

奴隷は出会う

道中何度かトラブルはあったが僕達は無事に目的地へ着くことが出来た。最もその目的地を知らされて無かった僕がそこが目的地だと知ったのは、ノールファさんが巨大な城壁の前で着いたぞと言った後だった

ウエスベニア帝国の首都ルクブラティオ。

例に漏れずモンスター達の避ける準聖地に建てられた首都を囲うように頑丈な城壁がある。これは他国の襲来に備えての意味合いもあるが、かつてドラゴン系の四期に襲われて首都が半壊状態になった過去の反省から城壁を防衛線として建造したという

何万人もの被害を出してなんとかそのドラゴンは退治したらしいが、脅威が去った後でもここまでの城壁を造ったのだから人々の心には未だ根強い恐怖が残っているのだろう

「もう百年程前の話だ」

そうノールファさんは話を締めくくった。

この世界には寿命が300を超える長寿種族もいるから、きっとそ

のドラゴンの姿が臉に焼き付いて離れない人もいるんだろうな。大学生の時なんかは時間があつという間に過ぎていったから、彼らにしたらドラゴンが襲ってきたのはついこないだのような感覚なのだろう

城壁に取り付けられた、これまた巨大な門の前には衛兵が何人か入門審査のようなことをしていて、僕達はその中の馬車の列に並ぶ。十日間の旅ですっかり馬車の扱いに慣れた僕は、前の馬車の後ろに上手く停めノノールファさんにドヤ顔するぐらいの余裕があった。

相変わらずノノールファさんは完全に無視をするけど

「次の馬車、前へ進め！」

衛兵の指示に従って前へ進めると御車台の横にノノールファさんがやってきて衛兵に許可証を見せる。衛兵はしばらくループのような物で確かめて納得したように頷いたので、僕は手綱で馬に進むように合図しかけたが、

「ちよつと待てー!! この書類によるとその御者の身分が明かされていないぞー！」

何を思ったのか、ノノールファさんは衛兵の言葉に戸惑う僕の右腕に巻かれた包帯を外し始める。

包帯はらめえ〜

ノノールファさんは嫌がる僕を無理やり押さえつけ、これ以上はこの小説の方向性を疑われることになるので自重しよう！

頭になった僕の右腕、正確には僕の右手の甲にあるヤドリギの焼印を見て衛兵はなるほど一息つく

「奴隷の所有権は持っているのか？」

「ああ」

「ならば、この奴隷がこの中で犯した罪は全てあなたが責任を持つことも」「勿論知っている」……ようこそルクブラティオへ」

巨大な門が開いた

中に入って直ぐに建物が並んでいるのかと思いきや、あるのは衛兵たちの休憩所だけちよつとがっかりだ

「思ったよりも建物が少ないんですね？」

「この辺りはかつての被害が酷かったのと、巨大な城壁の直ぐ近くにあるせいで常に薄暗く人も住みたがらないからな。もう少し先へ進めば建物も増えていくだろう」

ノノールファさんの言うとおりで、少し馬車を走らせれば大通りの脇に沢山の屋台や、武器屋、民家なんかが見えてきた。

馬車もまともに進めれないほどの人ゴミにつんざりしたのか、ノノールファさんは近くの馬車置き場で金を払い、馬車を預かってもらうと人ごみの中を歩き出した。

僕ははぐれないようにノノールファさんの背中を目印にして着いて行くが、美味しそうなお菓子の香り、煌く宝石、オルベスクでは滅多に見られなかった異種族についつい目移りしてしまう

僕が初めての都会に浮き足立っている中、ケットシーと呼ばれる二足歩行で人語を解する猫みたいな種族の子供が股の間をすり抜けて行った。その子を追うようにして追いかけていったケットシーの子供は兄妹なんだろうか？

「さつさと来い」

ノノールファさんの言葉に僕の体は勝手に動き出す。人ごみが嫌いなノノールファさんはウロウロとする僕に我慢出来なかったらしく奴隷としての命令を使ってまで早く人ごみを抜け出したいらしい

また更に大通りを進むと、宿場が集う一帯にたどり着いた。ノノールファさんはその中で三番目に大きいであろう宿『アヒルの水浴び亭』で部屋を借りると、

「何日になるかは分からないが、私の用事が済むまでここで滞在する。宿から出て構わないが行くならなるべく大通りの店にしろ。それと暗くならない内に宿へ帰れよ」

まるでお母さんみたいだ

「用事って、いったい何の用事なんですか？」

「お前には関係ない用事だ」

そう言うとノールファさんは僕の手の上にジャラジャラと音の鳴る布袋を置く。

この袋の中には今まで僕が買ったパンの代金の何倍ものお金が入っているのだろう

「それが当面の生活費だ。宿代は既に払っているから食事は一階のキッチンに言えば作って貰える。安い魔導書なら二冊は買える金額だから決して無駄遣いはするなよ」

そう言われながらも僕の脳内では高速でこのお金を何に使おうかと考えている。このお金があれば通りで売っていたお菓子も、果ては宝石までも買えるのだ！

それほどまでに魔導書一冊の価値は相当なもの。

その後、ノールファさんにしっかりと毎日古代語の勉強をするようにと釘を刺された。馬車の中に古代語の本が入っていたときから

嫌な予感はしていたが、まさか旅先でも勉強する破目になるとは……

「返事は？」

「……はい」

ノノールファさんが隣の部屋で寝静まるのを確認し、僕は左腰のベルトに突き刺しているロングソードの鞘からその剣を抜きだした。剣身は月の光を反射して怪しげな光を放っているようだ

そうこの剣は綺麗過ぎるのだ。モンスターと戦闘した場合、その血糊や毛、骨なんかに当たると細かい傷がついたり、欠けたりするのだがこの剣にはいっさいの汚れがない

「さすがに全然闘えないとは思ってなかったな」

ここまで来る途中で結局僕は一度も闘わなかった。いや、闘えなかった

何度かノノールファさんが弱そうなモンスターを見繕って相手をさせようとしてくれたのだが、いざモンスターの前に立つと情けなく

も膝が震えてきてしまう

剣先もブルブル震えながら構える姿に、初めて見た人は新しい流派ではないかと思ってしまうだろう

そんな僕に闘いをさせるほどノノールファさんも鬼畜ではないように、ここに来るまで全てノノールファさんの魔導によってモンスターは撃退された

本当に我ながら情けない

ここまでの説明だと僕をかなりのヘタレと勘違いしてしまう人もいるかもしれない
実際そういう自覚はあるけどここは少し僕に弁解のチャンスを与えてくれ

まず普通の人間がライオンに勝てるか？ 答えは勿論ノーだ
基本的なスペックが全然違う上に、その圧倒的な迫力にたいがいの人は戦意喪失してしまうだろう。中には己の体一つで勝ってしまう地上最強の生物もいるかもしれないがここではそういう例外は無視することにする

獣系の一期のモンスター、リュプスは黒い靄を被った狼のような存在なのだが、その迫力はライオン程ではないにしても野性の脅威を感じるには充分だ

そんな存在に勝てるだけでも？

……もうやめよう。これ以上醜い自己弁護をしても空しくなってくるだけだ

僕がビビりでヘタレだったから何も出来なかった。それが事実

次こそはモンスターと闘う、そんな決意さえ今の僕では出来そうにない

このどうしようもない気持ちを晴らすと剣を無茶苦茶に振り回して、机の上に載っていたコップが落ちそうになったところで急にバカらしく思えて僕はベッドに身を投げ出した

やはり長い旅で疲れていたのか、直ぐに意識は闇の中へと落ちていった

翌朝、隣の部屋には既にノノールファさんの姿はなく、宿屋のおばちゃんに聞いてみたところもう何処かへ出かけた後らしい。

「おばちゃん、朝飯ちょうだい」

「はいよー」

うん。脂っこいようで胸に残るしっこい味つけ

だいたいこの世界では主食が肉でパンがおかずと勘違いしている節がある。いくら若者の胃とはいえ、朝からステーキはさすがにキツイ

コップの中の水で胸に溜まった嫌な感覚を流し込んで早速僕は街へ出た

街は朝から賑やかだ。

吟遊詩人が愛や冒険談を語り、商人がその欲をたらふく収めた太鼓腹を叩いて客を呼び込む。そして何処の街でも子供たちは大人の汚さを知らないキラキラした瞳で通りを駆け回るのだ

その騒がしい通りの端で邪魔にならないように歩いていると、僕の前に先客がいた。

灰色の美しい毛並みを持つ猫。尻尾をフリフリと動かしながら歩く様子は気品すら感じる

「やあ、猫。元気かい？」

猫は僕の声に一度振り返ると、興味を無くしたようにまた歩き出す。少しムツとしないでもないが猫というのは大抵そういうものだ。気まぐれで嘘つき、間違いなく変化系だろう

そんなにやることもないので猫の後を追跡する

猫は煩わしそうに僕を見たが、好きにきなさい！ とばかりに再び歩き出したので大人しく着いていく。

しばらく歩くと猫は大通りを外れ、脇道へと進んでいく。僕の頭の中にノールファさんの言葉が過ぎつたが、『なるべく』とも言っていたことを思い出しわき道へと足を進める

好奇心は猫をも殺すという言葉が今の状況にあまりにもピッタリで少し気味が悪いが、ここで帰ってしまうと何かに負けた気がして、僕の自尊心に火を点けた

ニャー、ニャン

ウニャー。ゴロゴロ

前に行く猫の横から知り合いの猫がやってきてそんな挨拶を交わす。道を進む度にどんどん猫の知り合いが合流して来て、今はちょっとした団子状態だ

ここまで自然に集まるとはおかしい、何か目的があって集まってきたいるのだろう

「いったい何処まで行くんだろう?」

既に猫に着いていって三十分以上は経つ。結構複雑な道を通っていたので帰り道すらあやふやだ

……………ヤバイ、どうしよう

今ならまだ何とかかなりそうだが、ここまで着いてきたのだからこの猫達の目的地は何処なのか突き止めたい気持ちもある

だが猫たちはそんな僕の気持ちも知らず一気に駆け出した。

「ええい、ここまで来たなら最後まで着いていくさ！」

猫の尻尾を追いかけて路地を曲がると、そこはちょうど建物に囲まれた空き地のようになっていてその真ん中に猫の山があった。比喻ではなく、猫でつくられた僕のお腹ほどの高さの山がそこにはあるのだ

猫の山、改めニャンニャンマウンテン（たった今僕命名）はしばらくその雄大な景観を保っていたが、ブルブルと噴火前のようにその表面を震わせ猫たちのがけ崩れが発生

ニヤー、ニヤーと可愛らしい声と共に崩れた山肌には人の、眼鏡をかけた可愛らしい女の子の顔を覗かせる

僕達はしばらく呆然と無言で見つめあい、

「「ど、どうも始めまして」「

ハモった。

少女との出会い（前書き）

今回キリ良く終わらせるため短いです。すみません

少女との出会い

ニヤンニヤンマウンテンの中腹から現れた彼女の名前はニヤンニヤンプリンセス。ではなくクインネミアというらしい。色白の肌と大きな瞳を隠すようにレンズの分厚い丸眼鏡をかけているのが損をしているとしか言えない程の美少女。

そんな少女がなぜ猫の山の中にいたのかというと、毎日猫を餌付けしていたらいつの間にか懐かれて今日のようにじゃれ付かれるようになったらしい。あれがじゃれ付くというのか甚だ疑問だ。どちらかというと襲われていたに近いんじゃない？

「君は変わっているね」

「いや、わざわざ猫を追いかけてこんな所まで来る君こそ変だと思っよ」

そう言っつてパンパンと服を叩いて彼女は汚れを落とす。猫にじゃれ付かれる前から汚れていたんだと一目で分かるほど服は汚れ、破けた後を別の布で縫い付けている様子から彼女の家は裕福ではないのだろう

あちこちに跳ねて、キューティクルも瀕死の状態の銀髪を少女は軽く撫ぜるがその程度では戻りそうにない。僕が『トリートメントはしているか？』と聞いたところで直ぐに否定されるだろうことは分かっていたので勿論口には出さなかった。彼女も手櫛では直らないと考え、途中で髪を整えるのを諦めると僕のことを興味深そうにジ

ロジロと見つめだす。

う、気まずい。純粹な瞳が何も悪いことしてないはずの僕に罪悪感を感じさせる

これは新手の精神攻撃か!?

「確かアラン……君だったよね?」

いつの間にか僕の膝の上に納まっていた猫を撫でながらクインの言葉に頷く。僕の手をおもちやか何かと勘違いしているのか、執拗に猫パンチをしてくる猫の喉を擦って逆襲してやる。

猫は最初抵抗を見せていたが指先の神業レベルのテクニクにあえなく屈してゴロゴロと喉を鳴らし始める。ふふっ、僕の手にかかれば女(メスだと後で確認した)なんてこんなものよ

「アランでいいよ。僕も君のことクインって呼ぶから」

クインネミアは呼びにくいからクイン。我ながら中々のセンスだと自画自賛してみる

「……………」

「やっぱ さすがに図々しかったかな。まだ僕達知り合ってたばかりだしね」

「 違うの! ……そうじゃないの。私、そんな風に呼ばれたの初めてだから……………」

クイン（もう勝手に使っている）は満足そうに自分の愛称を何ども確かめるように繰り返して、その語呂が気に入ったのか眩しい笑顔を浮かべた

それはクインが少し暗そうな少女だと思っていた僕の固定観念を粉々に打ち砕くのに十分な威力だった。

そんな中でも猫は空気を読まずにしきりに僕の右手を攻撃している。

痛っ！？

こいつ引っ掻きやがったな！！

「あ、ごめんなさい！ この子普段こんなことしないのに……」

「こんなの平気だよ」

そう強がってはみたものの実際結構痛い。クインがいなければ叫んでいたところだ

一応血が出てないかどうか、右腕に巻いた包帯を外して確認してみたが少し赤くなっていただけだった

それでも痛いものには変わりがないので猫をギロツと睨んで脅したが、猫はまったく怯まず睨み返してきた。その様子はまるでクインという姫を守る騎士のように堂々としていて、先に目を逸らしたのは僕の方だったりする。

猫に負ける男というのも新しくてカッコいいんじゃないかな？

ダメ？　そうですか……

「!? それ……」

うん？ 何やらクインが僕の右腕を見て固まっているぞ。ガキ大将にやられた傷跡はまだ残っているかもしれないが、見れないほどの傷でもないはず

いったい アツ、なるほど…

右腕の甲の焼印。それを隠す為に包帯を巻いていたことを僕はすっかり忘れてしまっていたようだ

「じ、じゃあね！」

急いで包帯を巻きつけて逃げへの一步を踏み出そうとした右足が不意に掴まれた。

バランスを崩した僕は顔から気持ちいいぐらいの勢いで地面に激突する

「ま、待って！ に、逃げないで」

クインは子供だし、僕が奴隷だという秘密を誰かに喋ってしまう恐れがある以上、僕は逃げざるを得ない。奴隷というだけで変な言いがかりをつけてくる奴らはたくさんいるのだ。それにもし在られない罪を押し付けられた場合、主人であるノールファさんの罪にもなってしまうかねない。

恩師であるノールファさんの期待を裏切るような真似はしたくないという気持ちが一番だ

「は、離してくれよ」

クインは全身に力を込めて僕の足を引っ張りつつ、突然自らのスカート裾を捲り始めた。いきなりの行動にしばし呆然した後、直ぐに止めるようにクインの腕を押さえ込む。
女の子がそんなはしたない真似しちゃいけません!!

こんな光景を人が見たら、きっと僕が少女に変態行為をしようとしているように見えるだろうなと頭の隅で暢気に思いながらクインを止めようとしたが、予想以上に力が強い

剣術道場に通っているとは言え、長年のストリート貧困生活で体もあまり大きくない僕ではただでさえ長期真つ盛りの同年代の女子の力には勝てず、その暴行を許してしまった

「見て、私のこ」

そんな甘い誘惑には乗らないとしっかり目を瞑ってみせる。同年代とは言え前世の分を合わせるとかなり年下なので、そんな厭らしい気持ちを抱いたりしないがこれは男としての最低限のマナーだ

ところが不意に目を突かれて、痛さのあまり思わず目を開いてしまう
そこで僕が見たのは太ももの辺りまでスカートを捲し上げているク
インの姿だった。

急いで目を閉じようとしたが少し違和感を感じて、指の隙間から覗
いてみる

ん？ クインの太ももに何かある。

皮膚が黒ずみ、何やら植物の図柄を作り出しているそれに僕は酷い
既視感を感じた

「君はもしかして……」

「そう、私も奴隷。あなたと同じ」

……………なん……だと？

互いの主人（前書き）

何だか、最近主人公を痛めつけていない。これからもっと厳しくしていきなう！

互いの主人

「靴の泥はこの布で拭ってね」

「……うん」

同じ奴隷ということですから、意気投合した僕達だが、まさかクインの主人の家に行くことになるとは思わなかった。クインの話によると、少し怒りっぱいけどいい主人らしい。

クインのボロボロの服装からあまり裕福な家ではないと予想していたが、中々家も大きい。

「この服は外に出るときに着ているの。その方が良いつてケインミストさんも言っていたから」

ケインミストというのはクインの主人なんだろう。不思議と何処かで聞いた覚えのある響きだ。

クインにわざわざボロ服を着せている理由はあまり頭の良くない僕でさえ分かる。僕の前を得意気に先導しているクインの容姿は控え目に言っても整っている。彼女が良からぬ奴に目を付けられないようにボロ服で興味を削ぐという考えなのだろう。

……あれ？　もしかして僕ってその良からぬ奴なのか？

脳内に浮かんだ考えを払い捨ててそのまま家にお邪魔するとケインミストという主人に紹介されることになった。ケインにとって僕は初めての友人らしく、主人に自慢したいらしいが会って数時間の人間が友人と言えるかどうか果てしなく微妙だ。お互い知っていることと言えば互いが奴隷で猫好きってところぐらいだし　いや、猫好きってだけで僕達は同士だから友人と言っても差し支えないかも

そうこう考えている間にそのケインミストって人物の部屋の前に着いたらしくケインが止まる。

「ケインミストさん、私親友が出来たの」

いつの間にか友人から親友へ格上げされている！？

ケインのお尻にブンブン振り回している猫の尻尾らしきものを幻視した

ケインが勢いよく開けたドアの向こうには円形の部屋の壁沿いに天井まで届く本棚がいくつも置かれていた。距離が少しあるので本のタイトルは分からないが見覚えのある古代文字だ。古代文字で書かれている本なんて魔導関係にしかないからケインミストは魔導師なのだろう。当の本人らしき人物は部屋の端の書斎机で魔導書に没頭

していたが、クインの声で椅子をクルリと回転させこちらと向かい合う

「ふむ。そこに立っているのがクインネミアの親友なのか」

しゃがれた声と皺からして年齢はおそらく七十代。しかしまったく衰えることのないその双眼の鋭さと、獅子を連想させる風貌の白髪が歳を感じさせない。これはあくまで僕の予想だから実際思っているよりももっと若いのかもしれないけど

とにかく僕は彼のその威厳に少し怯んでしまった

「は、初めまして。アランと言いまひゅ」

クツソーーーー！ 噛んじまった！！！！

核シェルターがあったら入りたいとはこのことだ

ケインミストは噛んだ僕を思案の表情で眺めると鼻で一笑する

「ふっ、クインネミアの騎士にするのには頼りないな」

「ちょっとケインミストさん！！ 私の親友をバカにするならケインミストさんでも許しませんよ」

「ジョークだ。ジョーク。それよりクインはまだ日課の洗濯が終わ

つてないんじゃないか？」

「あ!?! アラン君は少し待っててね。直ぐ終わらすから」

そついい残すとクインはドアを蹴り飛ばす勢いで出て行った。あんなに急いで行かなくても僕は逃げやしないというのに

..... クインが居なくなつた後部屋の中には僕とクインミストだけが取り残された。お互い何か言い出すこともなく気まずい空気が部屋を包む

ここは若い僕から話題を提供するべきか。ご趣味は? お見合いじゃあるまいしボツだ

「..... まあ、そこへ座れ」

沈黙を破つたクインミストが勧めた先の木製椅子に僕はおつかなびつくり腰を下ろす。向かい合ってみると更にクインミストの威圧がプレッシャービンビン感じられて、まるで目の前にモンスターがいるみたいだ

「私にとってあの子は実の娘のようなものだ。それを理解した上でこれから私の出す質問に答えろ」

真剣に語りかけるクインミストの表情に思わずゴクツと喉が鳴る。

「ここまで来たということはあの子から聞いているとは思いますが、あの子は奴隷だ。……子供のお前には分からないかもしれないが、奴隷というのはお前が思っているよりずっとつらい生涯を生きる事になる。」

もしお前があの子をその場の同情や憐れみでここまで着いて来たと言うのなら悪いことは言わないから帰れ。

今までもクインネミアは何人もここに人を連れて来たが奴隷だと知ってからの態度は酷いものだった。そうでなくとも奴隷と仲の良いことを知られたら周りからも非難を浴びる。どちらにしても人はいずれ離れていくのだ。今なら離れてもまだあの子の傷は浅いだろう。」

「ケインミスト……さん」

ケインミストは何だ？ というふうに首を傾げる

「クインネミ……クインはそんなに弱い子じゃありませんよ」

「！？ 貴様は、貴様は今まで傷ついたあの子の姿を見たことがないからそんな事が言えるのだ！ 私は何度も見てきた！」

「だったらクインは一生友達が出来ませんよ。同情でも憐れみでも、きつかけは何でも良いんです。クインもそれを分かっているから会ったばかりの僕と話したんだ。心が傷ついているだけの弱い人間ならそんなことしないとありません？」

ケインミストは神経質そうに頭をボリボリと掻いて苛立ちを隠しきれないでいるようだ
よく見ると白髪が何本も抜け落ちている

「口ばかり達者な小僧め！ …… だったらお前は周りからどんなに非難を浴びようと、露骨な嫌がらせを受けようとあの子の親友であることを誓えるか？」

「ずっと親友であることは分からないけど、少なくとも僕はあの子を見捨てたりはしませんよ」

「ほう、大した自信だな。何か なっ!？」

途中まで言いかけたケインミストさんは僕の包帯を解いた右腕の甲を見ると、今までの怒声が嘘だったかのように押し黙った

「僕も… 奴隷ですから」

「本当にもう帰っちゃおうの？」

見るからにしょんぼりしたクインの表情に僕も少し悲しくなってしまう。

とは言え、ケインミストさんのご好意に甘えてしまつて既に日も暮れかけているし、あまり遅く帰るとノノールファさんが心配……するかもしれない

「また明日来るよ。邪魔じゃなければだけど」

「そう。じゃまた明日ね」

宿へ帰るとちょうど夕食時らしく賑やかで、僕は店の隅のテーブルでパンを食べているノノールファさんの姿を見つけると隣の席に座る。内心遅くなったことを怒られやしないかとヒヤヒヤだったが僕の方を見て再び食べ始めたのでokだと勝手に判断する。

「ノ、ノノールファさんは何時ごろお帰りに？」

塩味の薄いスープを水のように飲み干しながら訊ねる

「半刻ほど前だな」

続いてTボーンステーキのような今夜のメインディッシュに被りつく。肉汁が垂れてきて服が汚れそうになったがすかさず肉を口の上まで持ってきて回避。服は汚れないし、肉汁の旨味が味わえるやらで二度お得だ

少々テーブルマナーが悪いかもしれないが、そんなのはこの美味なる肉汁の前ではたいした問題ではない

「どうやら魔導を少しは勉強したらしいな」

ギクツ！ な、何でそれを！？

口の中に物が入っていて喋れなかったが、ノールファさんは僕の表情で言いたいことの察しがだいたいついたらしく、説明をし始めた

「魔導書の腐食を防ぐ防腐剤の香りがお前の服からしたからな。それにしてもお前の体から香る防腐剤の臭いが強い。今回の旅で持ってきた魔導書はそこまでなかったはずだから、魔導書屋に行ったのか、何処かの魔導師の家に行ったかだな。まあ後者は来て直ぐの前に魔導師の知り合いがいるわけではないから有り得ないだろうが」

162

実のところ、あの後ケインミストさんに魔導師見習いということも明かすと酷く興味を持たれて直接魔導を教わったのだ。基本的に魔導師は師匠以外の教授を受けると、師匠に対して大変失礼にあたるのでこの事は勿論ノールファさんには内緒である

それにしても核心のすぐ近くまで突くと、全くノールファさんは大した推理力をお持ちだ。魔導師より探偵のほうが向いているんじゃないだろうか？

「まあ、例えどうであれ魔導の勉強を自ら進んでやるのは良いことだ」

「で、ですよ〜」

「いつまで続くか見物だな」

失敬な！

星降る日

十 十 十 十

呆れるほど広い宮廷の一室。その部屋の一つ一つの調度品が今帝国で有名な家具職人が手がけた物でテーブルにしても水差しにしても平民の十年分の稼ぎを優に超える

その中で気だるそうに肘掛け椅子に体を預けながら茹だっている少年がいた

「この中に閉じ込められてもう一ヶ月近くか。さすがに飽きてきた」少年は他人が嫉妬するほどの光沢を放つ銀髪が目にかかるのか、うざそうに首を振って視界を確保する。かといって少年は決して体が細く、貧弱な美少年というわけではない。力瘤こそあまり大きくないもののその筋肉は通常の大人以上だし、精悍さと美しさが合わさって良いところ取りをした顔立ちの持ち主だ

かつての英雄もかくやという程人々の理想の顔立ちの持ち主は、その見た目とは裏腹のだるそうな態度で備え付けのベルを鳴らした。やがてそのベルの音を聞きつけて老年の執事が現れる

「バトラー、いつになればこの牢獄から出られる？」

この場にそぐわない不躰な質問に対しても執事、バトラーは気にした様子もなくただ淡々と答える

「何度も返すようですが、イシュ。あなた様は王の大事な客人です。その証拠に王の部屋の次に大きく、絢爛豪華なこの部屋を用意させてもらわせております。ここが牢獄とおっしゃるのならはこの愚昧バトラー。あなた様をどうお扱いしていいものか分かりかねますな」

「部屋が豪華だろうが、閉じ込められていることは一緒だ。いくら欲しいものが直ぐに手に入るとはいえもう我慢できないぞ」

今にも暴れだしそうな雰囲気を感じたバトラーはこの少年にとって最大のストッパーとなっている言葉を放つ

「……………あなたのお父様もあなたのことを大変心配しておりましたよ」
「グツ……………」

少年イシュの父親オイデン公はここウエスベニア帝国において王の弟にあたる人物でつまりイシュは王族の一人ということになる。

数年前帝国のさる高名貴族の一人息子が出世欲のため王国との小競り合いに出て遺体で帰ってきてから、その高名貴族が王国と戦争を起こそうと下級貴族を集めてタカ派を組織しているのはもはや帝国

内では衆知の事実だが、それを止めようとしているのがハト派の最大権力であるオイデン公だ。当初その計画はオイデン公の権力もあり上手く進んでいくように思われた

だがそのオイデン公の努力も最近は空しくなりつつある。何を隠そう、そのオイデン公の息子であるイシュ自体が父親の計画を狂わした張本人なのだ。とはいえ特別イシュが外交上問題となる事件を起こしたわけではなく、その力が問題だった。

『気』と『魔』の両方が使える。この史上初の存在が発覚した時点では魔導師や騎士が騒ぎ立てたぐらいでそれほど影響力はなかった。問題はイシュの天才としかいいようがない才能だ

気に関しては初めての戦闘で騎士に勝ち、魔に関しては誰にも教わることなく魔光を操っていた。それも9才の少年が

このまま育てば将来いつたいどんな人物になるか、そんなことが欲望渦巻く宮廷で知られればその内イシュを祭り上げて王国との戦争に持って行こうとする良からぬ連中も出てくるはずとオイデン公は考え（実際出ている上に最近では王も戦争に乗り気の様子である）、ほとんど宮廷内で軟禁状態にしているのだ

普段はモンスターへの対応に精一杯な点もあり他所との戦争にかまけている暇はないが、イシュという余分戦力が出来た為、戦争がそう遠くない未来に起こることも十分有りえる

それを分かっているからこそ、イシュも父であるオイデン公の名前を出されると強く出れないのだ。なにせ自分が帝国のプロパガンダになることを防いでくれているのだから父には何度感謝しても足り

ないほどである

「ちなみに父上は今どうしておられる？」

「王国からいらした和平の使者と話しこんでおられるようで、残念ながら今日も会えないだろうとのお言葉を預かっております」

「そうか」

父の顔をもう数ヶ月は見えていない。イシユの脳内には心労でゲツソリと痩せている父の顔がそれは容易に想像できた

十 十 十 十 十

酷い雷鳴が窓の外で鳴り響いている。時折ピカツと光る度に外套に包まっていた人影がビクリと神経質に反応して、次にくる雷の轟音に耐えようとしている様子は見ているこちらが哀れになってくるほどだ。

「ノノールファさんエ……」

思わずそんな言葉が出てくるのも仕方ないだろう。だってそこには普段見ているノノールファさんの冷静さとかカッコよさとかがスッ

パリ抜け落ちたヘタレの姿があつたのだから

「うるさい。奴隷は奴隷らしく黙って座ってる」

ノノさんの言う奴隷らしい座り方が分からなかったのととりあえず無難にベッドの上に乗る。昨日の夜から外の天気は荒れ気味だったが、今朝から本格的に荒れに荒れて今は雷鳴と共に雨が降り注いでいる。そんな中でもノノールファさんの仕事はあるようで送迎の人が大仰な馬車に乗ってやって来たが、どういう訳かノノールファさんはベッドの中から出てくる様子がない。具合が悪いのかもしれないと思つてやってきた人にその旨を伝えたと渋々と帰っていった

朝食の時間になつても一向にやってくる気配を見せないノノールファさんが心配になつて、女将さんに病人でも食べれるような物を作つてもらい彼の元に届けたが断られてしまった。

さすがにおかしいと感じ始めていた所、このように雷に分かりやすい反応を示していたので鈍い僕にも分かるというものだ

普段は冷静だが雷に弱いなんて何処のヒロインだよ！

萌えるぞ、コンニャロー

……いや、今のはジョークだ

とにかく今日のヘターレファさんを放っておくわけにもいかないし、この雨ではクインとの約束も守れそうに無いな。

「本当に残念だね。今日は星降りの日だったのでにさ」

「本当ですね」

女将さんとの昼食では当然そんな話が出てくる。

星降りの日とはこの世界にとつての年明けのようなものだと考えてくれるといい。空にある星がまるで全て落ちてしまったかのように流れ落ちて行く光景は何度経験しても感動する。

この星が数多の星と呼ばれるのもここから来ているそうだ

だからこの天気だと曇ってて上手く見えないだろうという話題はこの宿の中だけでなくおそらくルクブラティオ中で話されているだろう。それほど国民全員、いやモンスターを除く世界中の全ての生き物がこの日を待ち望んでいるのだ

そんな祈りが通じたのか、はたまた神が哀れな人間に施しを与えたのか、雲は西の方に去ってしまい日が差してきた。先ほどの雨が大気の汚れをすっかり洗い流してしまったよう。植木の露にもたしかな命の息吹を感じ取ることさえ出来るほどだ

ノールファさんも頭を抱えながら二階から降りてきてようやく食事を取りだす。

ずっと外套に包まっていたせいか灰色の髪はあっちこっちへ跳ねているがそれがまた遊び心を加えた上級者のお洒落っぽくて憎い。僕

が朝起きてどれだけ大変な目に会っているか！ クセ毛は直すの大変なんだぞ

「……今夜は晴れそうだな」

「ええ、きっと綺麗な星降りが見られますよ」

案の定夜は満天の星空。

本当は首都の外にある小高い丘に行けばもっとよく見えるのだろうけど、そういう訳にもいかないので宿屋の屋根に上って夜空を眺める。周りを見渡すと同じように屋根に上っている人がチラホラいるので特別浮くということもなく安心して見れる

ノノールファさんがすわり心地の良さそうなクッションを一人お尻に敷いて星降りが始まるのをただジッと空を見上げて待っている間、僕はクインも来ればもっと楽しかっただろうなとボンヤリ考えていた

そのまま待ち続けて二時間

斜め上の星が流れるのを切欠にして次々と星が流れ始める。首都中で感嘆の聲が上がり五月蠅いほどだ

「何時見てもいいものだ」

「そうですね」

もはや空は尾を引く流星群で埋め尽くされた。空にある星が全部流れていくのだから天文学的に見たらさぞ恐ろしいことなんだろうが被害はないし、この日が終わるとまた次の星降りの日まで徐々に夜空に星が戻ってくるので心配ない

「あっ！？ アラン君いた！」

その元気な声は……

屋根から声の方を見下ろすとやはりというか、クインの姿が

その後ろからはケインミストさんの姿もある。なんとかこちらを上るうと無謀な挑戦を繰り返すクインに中から来る様に言々とまぶしい笑顔を見せて宿屋へ駆け込んだ。

ケインミストさんと会ったノールファさんが「何故！？ こんな所に師匠が……」「久しぶりだな。顔も見たくなかったが」との不毛な話し合いをするのはまた別の話だ

闇夜の襲来

路地裏のちょっとした隙間、曲がり角、藁山、屋根の上。

幼少時代、そんなところに潜んで隠れるのが好きだった。そうして幼馴染や大人が近くを通る度、ワツと声を上げながら飛び出した時の驚く顔といったら、もうそれだけで他の遊びの必要性も感じないほど嵌っていたものだ

そしてそんな俺がよりスリリングを求めて帝国の騎士を脅かした事から捕まるのにそう時間は掛からなかった。本当にあの頃の俺は頭のネジが一本どころか五、六本抜けていたんだと思う

だが、その隠密の才能を師匠に見出されてアサシンになれたのだから人生というのは分からないものだ。

今回の任務は宮殿に住むさるお方を暗殺すること

珍しくない任務だ。暗殺する人物の人相を聞くと、もうそれ以上の情報はシャットダウンする。あまり暗殺相手の詳しい話を聞きすぎると死期を早めることになるぞという師匠の教え通り、暗殺業を始めた日から必要以上の情報は聞いたことはない

例え今回の暗殺相手が王族縁の印である輝くような銀髪を持ち主であるとも……俺は任務を遂行するだけ

深夜、事前に雇い主から衛兵の巡回ルートを教えられていた俺は拍子抜けするほどあっさり宮殿内に潜入した。ここまで正確な情報を持っているのはおそらく内部の人間のみ、そこまで考えて頭を振り払った

余計なことを考える必要はない。今の俺に必要なのは任務を遂行するための冷静な判断のみ

潜入中のため深呼吸するわけにはいかないので、浅く長く息を吸って平静を取り戻す。

…… 良しっ、大丈夫だ。問題ない

宮殿と王の奥方が住むハレムを繋ぐ渡り廊下の柱の影に身を潜めていた俺は、取り戻した平静のおかげで微かな物音に気づいた。ジャツ、ジャツと大きくなるこの音は間違いなく誰かの足音

師匠に山ほど夜襲をかけられて命を落としかねない経験をした俺には分かる

急いでほとんど取っ掛かりのない柱の上にスルスルと登り、屋根の上に避難するのとはほぼ同時に寝巻き姿の女性が月明かりの下に見えた。どうやらハレムの一員らしく、胸元が大胆に開いた寝巻きから見える艶っぽさはそこらの娼婦にはない自然なものだ

どうやら用が足したいようで、さっさと小走りで行くのを見送ると俺は再び屋根から降りて目標の人物の寝室へと向かう

さすがに王の住まう宮殿だけあってそこら中に魔導で侵入者を検地する罫があつたが、寝室までの道のりにある罫は全て生きていない。これも全て依頼人の手によるものだ

いよいよ寝室前まで来たところで不足の事態が発生した

予定では就かなかつたはずの護衛兵士が三人。寝室の前を固めているではないか

一瞬この依頼は罫かと考えたが、もしそうであれば既に自分は捕らえられているはず。依頼者側にもこの警備は予想できなかったのだらう

まあ、こつちも謝礼の量からして簡単に済むような仕事とは最初から思つてない。こういう不足の事態にも慣れつこだ

トントントン

角を曲がつた先にいる衛兵たちに聞こえるように壁を叩く。すると直ぐに様子見のため三人の内の一人がやってくる
直ぐに首にナイフを突きつけ、

「動くな、動いたら殺す。喋つても殺す。分かつたら黙つて頷け」

目の前の兵士は情けない位に震えながら、それでもコクリと頷いた

「残っている二人の兵士の内一人をこちらへ呼び出せ。怪しげな言動をとれば直ぐに殺すぞ」

「は、はい。……おゝい！ ちょっとそこで足を挫いちまった。起きるの手伝ってくれないか、コマド」

曲がり角の先でブツブツ文句を言いながらコマドという名前の男がやって来るのを確認すると、呼んだ男をナイフの柄頭で殴って気絶させる。似たような手で残り二人を片付け一息ついた

任務は順調。多少の予定は狂ったがそれさえも予定の範囲内だ。後は目標を暗殺するのみ。自殺に見せかけることや特赦な毒を盛って自然死に見せかけることもできるが、今回の依頼はなるべく残酷な遺体をつくるというもので対処が楽だ

目標の眠る寝室のドアは軋みもほとんど無く開いた。部屋は広く煌びやかで、だからこそ白木で作られた天蓋付きのベッドが良く映えている

この部屋の家具を調べた人物の才能は、その手に疎い自分でさえよく分かるのだから相当なものだろう

そんなことを思いつつ、ゆっくりと目標の人物が眠る天蓋を覆う薄い布を手でさつとどける。

イシュが起きたのは深夜三時を回ろうとするところだった。ふと用が足したくなつたわけでも、星降りが終わる唯一夜空を照らし出す月明かりが眩しくて起きたわけではない

今日から父上の命令で部屋の扉の前に立つことになつた見張りの気配が消えたことに気づいたからである

おかしい。交代の時間でもないのに三人の見張りが一気に消えるのは無用心だし、そんなような事を仕出かすような見張りが王族のイシュの衛兵になれるはずがないからだ
そして微かに未だ動く人の気配も感じる

(これは侵入者が現れたに違いない。それもおそらく自分を狙つて…)

その程度には自分の重要さをイシュは理解している。そして重要な人物はそれを慕っている人と同じくらいの敵を作り出すことも
目的は誘拐か、暗殺か？ どちらにしても好ましくない

不味いことになつたとイシュは咄嗟の判断でベッド下に隠れることにした。様子見に出て侵入者と出くわすのは剣を所持していない今
最悪なパターンだ

しばらくすると音もなくドアが開き何者かが入ってきた。ベッドの下からなので足しか見えないが、衛兵の履くレザーブーツや従者の履く柔らかな靴でもなく、見えたのは生足だった

多少武術に心得のあるイシュにはその足取りが常人のそれとは違う

ことに気づいた。大理石の床に生足をくっ付けておきながらペタッペタッという特徴的な音がしないばかりか、本当に全く足音が聞こえないのだ

何者かは知らないが、よほどの腕の持ち主だろう

ここまで凄腕の人物がベッドの下の自分に気づかないはずがない。ベッドに自分がないと知れば直ぐにでも見つけるだろう。しかし助けを呼ぼうにも近くの衛兵は皆やられている恐れがある。となるとイシユに残された手は不意打ちで怯んだ隙に逃げるしかなかった。まだ子供だが体術の腕は人並み以上にあると自負している。魔光を集めた拳を急所に叩き込めば死ぬことはないにせよ、相手の機動力を下げるには十分だ。後は宮殿の中にある騎士の休憩所まで逃げればひとまずは安心

謎の侵入者がついさっきまで自分が寝ていた天蓋付きのベッドの天幕をめくる物音がしだすと、いよいよイシユは覚悟を決め、手に魔光を集める準備をする

侵入者はベッドに自分がないことに気づくと辺りを慎重に探り始めた。緊張で額から汗がツーツと頬へと流れていくのを感じながら、恐怖ですくむ己を心の中で激励し、いざ飛び出そうとする瞬間だった。

イシユの部屋の扉が大きな音をたてて勢いよく開かれたのは

自分は勿論だが、一番驚いたのは侵入者だろう。何せ侵入者にとつてこの宮殿の中は敵のど真ん中だ。

逆光のせいでその人物の顔は見えない。背は高いがガタイはあまり良くないようで、衛兵の援軍を期待していたイシユはそれに少し落胆した

おおよそ扉の前で倒れている衛兵の姿を見て、正義感に狩られてやっってきた文官の類だろう

とはいえ自分を助けに来てくれた人物に一人でやってくるので無く、大勢連れてやってきてくれとは現状からも到底言えず、ただ一秒でも長く侵入者の意識を惹き付けてくれと願うばかりだ

「……ここで何をしている？」

冷たい月明かりが差し込む静寂な部屋に男の低い声がやけに響く。侵入者はそれに答えることもなく無言でナイフを取り出すと、真っ直ぐ男のもとへと走り出した

男と侵入者が重なると同時にグシュツという音がして何かが倒れた。それがあまり月明かりの届かない室内の端で起きた一連の出来事

イシユの胸には罪悪感が膨れ上がっていた。自らの命を守るために一人の命が犠牲になる

そんな生々しい感覚を彼は体験して温室育ちの精神は崩れ落ちることもなく、逆に開き直っていた

犠牲になった彼のことを思えばこそ、ここで情けなく死んではダメだと。

たとえ死ぬにしても死後の世界で自分は一泡吹かせてやったぞと彼に告げる責任がある

そう考えると胸に巣くっていた恐怖は消え去り、流れる汗は覚悟へ変わった

イシユはベッドの下から素早く飛びだすと、瞬時にその人影へと詰め寄り真っ赤に光る魔光を宿した拳をぶつける

「グッ！」

鳩尾を狙った一撃だったが、相手もさるもの。闇に紛れて近寄ってくるイシユの気配に気づくと瞬時に手でガードされてしまった。しかし相手の肘から先がプランプランと意志なく揺れて骨折しているところを見ると、それほど無駄でもない一撃だったのだろう

再び魔光を込めた拳で殴ろうとしたが、イシユのそんな考えを読んでいた男は腕を間接と逆側に捻り上げる。あまりの痛さに声を上げるイシユに思わぬ声がかかった

「落ち着きなさい、イシユ。私は敵ではありません」

その声に既知感を感じたイシュは恐る恐る後ろを振り向いた

「……バトラーじゃないか。脅かすな」

「フウ。勝手に勘違いしたのはあなたですよ」

バトラーの声で落ち着き始めたイシュは曇りガラスが晴れるかのよう
に視界も開け始め、薄暗い室内に倒れているのが先ほどの侵入者
だということに気づく。

部屋の灯りを灯し、おもむろにその侵入者に近づいたバトラーは人
相や持ち物を一通り検査するとイシュの方へと振り返った

「やはり個人を特定できるような物品はありませんね。本当は生け
捕りにできればよかったです。あなたが隠れているのに気づか
れて人質にとられるよりはマシでしょう」

イシュはバトラーの言葉の半分も耳に入らなかった。あの小言が五
月蠅く、変なところに気がつく皮肉屋のバトラーが腕利きの侵入者
を殺し、あまついかにもそれらしく死体の懐を探っている様子を見
て本当にこれは自分の知っているバトラーかと疑わしくさえ思う

だが当の本人は拍子抜けするほどいつものバトラーそのものでイシ
ユはより困惑を深くするばかりだ

「どうやらハト派の貴族が次世代の戦力になりそうなあなたを暗殺しようとする人を差し向けたのでしょうか」

到底、雇い主の息子に直接言うような言葉ではない。だがバトラーがあえて包み隠さず教えたのは自分を大人として認めていると受け止めて、ただ頷く

「俺はこれからどうしたらいい？」

そう言うと、急にクスツと笑うバトラー

「な、何故笑う？」

「いや、イシユ様も大きくなられたと思ひまして」

「意味の分からないことを言うなバトラー。それよりも暗殺者を送った貴族について何か心当たりはあるのか？」

「心当たりがありすぎて困りますね。手段はどうであれ皆国を真に憂う賢人ばかり、何時かは愛国心が暴走してこのような手段をとるのは予想の範囲内といえどもさすがにここまで手が速いとは……」

「ハト派の最大権力である父の抑止力ももう限界に近づいてきているわけか」

「ご明察どおりかと」

ウエスバニア帝国首都ルクブラティオにかつてのドラゴン襲来を思わす黒い暗雲が渦巻き始めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7890t/>

奴隸な僕と神々のポイント

2011年11月28日00時47分発行